

大蔵池南2号鉄穴流し遺構 二つ塚1号墳

—水道局配水池建設に伴う発掘調査—

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第79集

2009

津山市水道局
津山市教育委員会



大蔵池南 2号鉄穴流し造構遠景（写真中央池の下、南から）



同上（北から）



調査区全景（上が北）



同上（南から）



二つ塚 1 号墳遠景（北西から）



二つ塚 1 号墳全景（西から）

序

津山市は平成17年に近隣の4町村と合併して新市となりました。合併後の遺跡数は約2,200件で、この内旧久米町内は約660件あり、旧津山市に次いで遺跡の多い所であります。今回調査した大蔵池南2号鉄穴流し造構・二つ塚1号墳はいずれもこの旧久米町内にある遺跡で、水道施設の建設に伴い発掘調査されました。

大蔵池南2号鉄穴流し造構は、製鉄関連の鉄穴流しの造構としてほぼ全面を調査することができました。出土遺物がほとんど無いため、時期の特定には至っておりませんが、造構の性格を考える上での良好なデータが得られたものと思われます。

また、二つ塚1号墳は古墳の調査であります。調査の段階で古墳の上に神社が造られていた事が判明しました。神社は「車戸神社」で、現在は地元の藤和田神社に合祀されております。古墳そのものは、大きく破壊されていたため、出土遺物はあまり多くありませんでしたが、古墳の造られた時期は特定する事ができました。さらに古墳の下には弥生時代の造構が存在する事が新たに判明し、丘陵の高所に古くから人々が暮らしていた事もわかつてまいりました。

本書はこれら調査成果をまとめたものであります。小冊子ではありますが、今回の調査成果が今後の美作地域における調査・研究の一助になれば幸いであります。

なお、最後になりましたが、発掘調査から報告書作成にいたるまで、お世話になりました津山市水道局ならびに関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成21年3月31日

津山市教育委員会

教育長 藤 田 長 久

例　　言

- 1 本書は、津山市水道局の配水池造成工事に伴う大蔵池南2号鉄穴流し遺構、及び二つ塚1号墳の発掘調査報告書である。
- 1 発掘調査及び整理作業にかかる経費はすべて原作者である津山市水道局の負担である。
- 1 発掘調査は大蔵池南2号鉄穴流し遺構を平成20年1月7日～3月18日まで津山市教育委員会文化課津山弥生の里文化財センター主任豊島雪絵（現文化振興課津山郷土博物館主任）、二つ塚1号墳を平成20年4月22日～6月3日まで同文化財課主査小郷利幸がおこなった。その後、整理作業をおこない、本報告書を作成した。
- 1 本書の執筆は豊島・小郷がおこない文末に明記している。
- 1 調査に使用した座標は第V直角平面座標系で、X・Y座標数値はいずれもーで、二つ塚1号墳ではX軸は上3桁、Y軸は上2桁を一部で省略した。例えばX軸650は-104650、Y軸700は-37700を示し、単位はmである。方位は座標北を示し、高さは海拔高である。
- 1 出土遺物及び図面等は津山市教育委員会文化財課津山弥生の里文化財センターで保管している。
- 1 本書は将来的にはオンラインでの公開も視野に入れ、本書の全てのデータをPDFフォーマット及びAdobe Indesing CS2形式で保管している。

目 次

I.	遺跡の位置と周辺の遺跡	1
1.	遺跡の位置	1
2.	周辺の遺跡	5
II.	調査の経過	8
1.	調査に至る経過	8
2.	調査経過	11
3.	調査体制	11
III.	調査の記録	13
1.	大蔵池南2号鉄穴流し遺構	13
(1)	A遺構	13
(2)	B遺構	13
(3)	鉄穴流し実験	16
2.	二つ塚1号墳	17
(1)	調査前の状況	17
(2)	土層	17
(3)	上層遺構	19
(4)	古墳	20
(5)	下層遺構	29
(6)	出土遺物	31
IV.	まとめ	35
1.	大蔵池南2号鉄穴流し遺構	35
2.	二つ塚1号墳	36
(1)	上層遺構について	36
(2)	古墳について	39
(3)	下層遺構について	40
V.	関連資料（車戸神社）	42

挿図・表目次

第1図 津山市位置図	1
第2図 大蔵池南2号鉄穴流し遺構周辺地形図	2
第3図 二つ塚1号墳周辺地形図	2
第4図 周辺遺跡分布図	6
第5図 傑文配水池造成平面図、場内整備平面図	9
第6図 工水配水池計画平面図、縦横断面図	10
第7図 大蔵池南2号鉄穴流し遺構平面図	14
第8図 土層断面図	15
第9図 鉄穴流しサンブル砂採取地点	16
第10図 二つ塚1号墳調査前周辺地形測量図	18
第11図 二つ塚1号墳調査前平面図	19
第12図 二つ塚1号墳土層図	21~22
第13図 上層遺構平面図	23
第14図 上層遺構石平面図	24
第15図 上層遺構石立面図	25~26
第16図 二つ塚1号墳墳丘測量図、土層図	27
第17図 遺物出土状況平面図	28
第18図 遺物出土状況断面図	29
第19図 下層遺構位置図、平・断面図	30
第20図 出土遺物（1）	31
第21図 出土遺物（2）	32
第22図 出土遺物（3）	33
第23図 見込に筆を描く磁器	38
第24図 車戸神社周辺切替図	42
第25図 車戸神社平面図	43
第26図 車戸神社社伝	43
第1表 二つ塚1号墳出土遺物観察表	34

写真図版目次

卷頭図版 1 - 1 大藏池南2号鉄穴流し遺構遠景	図 版 9 - 1 古墳全景
2 同上	2 破壊穴全景
卷頭図版 2 - 1 調査区全景	3 遺物出土状況
2 同上	図 版 10 - 1 遺物出土状況
卷頭図版 3 - 1 二つ塚1号墳遠景	2 下層遺構遠景
2 二つ塚1号墳全景	3 下層遺構全景
図 版 1 - 1 大藏池南2号鉄穴流し遺構	図 版 11 - 1 土層
調査地樹木伐採前	2 作業風景
2 樹木伐採後1	3 航空写真撮影風景
3 樹木伐採後2	図 版 12 - 1 現在の車戸神社
図 版 2 - 1 樹木伐採後3	2 現在の社
2 調査区全景	3 車戸大明神の額
図 版 3 - 1 A遺構、B遺構	図 版 13 出土遺物（1）
2 A遺構、B遺構	図 版 14 出土遺物（2）
3 調査区南側造成部付近	図 版 15 出土遺物（3）
図 版 4 - 1 B遺構	
2 A遺構上部 a - a' 断面	
3 A遺構下部 b - b' 断面	
図 版 5 - 1 B遺構上部 c - c' 断面	
2 B遺構下部 d - d' 断面	
3 e - e' 南断面	
図 版 6 - 1 作業風景	
2 航空写真撮影風景	
3 砂鉄採取実験風景	
図 版 7 - 1 二つ塚1号墳遠景	
2 二つ塚1号墳遠景	
3 二つ塚1号墳全景	
図 版 8 - 1 調査前	
2 上層遺構全景	
3 石検出状況	

I. 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 遺跡の立地

津山市は岡山県の北部に位置し（第1図）、東は勝田郡勝央町・奈義町、西は苫田郡鏡野町・真庭市、南は久米郡美咲町、北は鳥取県鳥取市、八頭郡智頭町と接し、市役所のある所で北緯35度3分58秒、東経134度0分25秒、標高は海拔99mである。面積は506.36m²で、その内田畠や宅地は19%で残りは山林・原野などが占めている。人口約11万人、市内の最高峰は鏡野町境の天狗岩（1,196.6m）、奈義町境の滝山（1,196.5m）で、一級河川の吉井川が加茂川、広戸川、倉見川などの支流を従え、流路を瀬戸内海にとっている。高速道路は市内南部を中国自動車道が通り、東西2箇所にインターチェンジ（津山・院庄）がある。鉄道は津山駅を中心に岡山方面の津山線、鳥取方面の因美線、姫路・新見方面の姫新線がある。

（大蔵池南2号鉄穴流し遺構）

大蔵池南2号鉄穴流し遺構は、津山市神代1501-1番地（北緯35度1分55秒、東経133度55分3秒）に所在する。津山市の西部の旧久米町内（平成17年2月28日に津山市に合併）に位置し、吉井川の支流久米川と倭文川とに挟まれた三角地帯には単独の山塊が見られる。

遺跡は、この稼山山塊南斜面に位置している。稼山一帯は稼山遺跡群とされ、数多くの遺跡が集中する地域である。遺跡は特に山麓の南東から南西にかけての丘陵上に密集しており、この密集地帯を中心とした一帯にゴルフ場の建設が計画され、昭和50年～52年にかけて開発予定地内の大規模な発掘調査が行われた。開発範囲内の埋蔵文化財は、古墳68基、集落址及びその推定地19箇所、鉄穴流し遺構83基、集石遺構8基に及び、このうち69の遺跡が調査の対象となった^(注1)。

大蔵池南2号鉄穴流し遺構は、稼山に多数存在する鉄穴流し遺構のひとつである。「鉄穴」は、砂鉄を採掘する場所の俗称であり、この砂鉄を洗い流して砂鉄を取り出す作業を「鉄穴流し」といい、山の斜面に溝を造り、上から下に向かって採取した土砂とともに水を流し、比重の重い砂鉄と比重の軽い砂とが選別されるものである。鉄穴流し遺構は、この作業を行うために花崗岩の山の尾根上や斜面につくられた導水溝の遺構である。遺構の規模は長さ20～200m、幅2～15m、深さ1～5mと様々である。

調査地は、稼山山頂から南西に派生する低い尾根の斜面に立地しており（第2図）、北側には大蔵池がある。遺跡の南側にはゴルフ場への幹線道路がとおり、道路を隔てた南側には、古墳時代後期の製鉄炉跡である大蔵池南製鉄遺跡が保存・整備されている^(注2)。



第1図 津山市位置図



第2図 大蔵池南 2号鉄穴流し構造周辺地形図 (S = 1 : 4,000)



第3図 二つ塚 1号墳周辺地形図 (S = 1 : 4,000)

本遺跡は、ゴルフ場建設に伴う報告書では、No. 7 鉄穴流し遺構、幅 10 m、全長 40 m とある^(註3)。その後、岡山県の遺跡地図が改訂され、本遺跡名となり数値は前報告を踏襲し時代は不明とある^(註4)。周辺には同様な遺構が多数あり、池の北側に大蔵池南 1 号鉄穴流し遺構、道の南側に同 3 号鉄穴流し遺構があり、ゴルフ場建設によりこれら的一部が調査されているが、遺構の時期は明確とは言い難い。

(豊島・小郷)

(二つ塚 1 号墳)

二つ塚 1 号墳は、市西部の津山市くめ 50 - 13 番地（北緯 35 度 3 分 20 秒、東経 133 度 55 分 13 秒）に所在し、大蔵池南 2 号鉄穴流し遺構の北東 25 km に位置する。中国自動車道院庄インターチェンジを西に向かうと久米産業団地がある。この団地は吉井川と久米川に挟まれた丘陵の南側にあり、北側山稜は鏡野町境である。この団地の南西の丘陵高所には、この団地に水を供給する既設の工業用水用と上水道用の配水池が造られている。今回この既設の配水池の西側に、新たに配水池を新設する事となった。この部分に本古墳は立地する（第 3 図）。本古墳の標高は 171 m を測り、ちょうど丘陵の頂部にあたる。1 号墳の南東側 15 m には 2 号墳が存在する。2 号墳は直径 10 m、高さ 1 m を測る円墳で、標高はあまりわらないが、1 号墳の方がやや高いようである。この他に 3 号墳（直径 8 m、高さ 0.5 m の円墳）が知られているが、現状では確認できない。本墳の南のかなり離れた場所にあるもので、3 号墳のあつたと思われる場所は、現在樹木が植えられている。しかし現状で地形が大きく変化されてはいないようである。このため、現状で確認できていないものの 3 号墳自体は現存するものと思われる。また、2 号墳と 3 号墳の間に緩やかな丘陵頂部があり、ここに車戸 1・2 号墳がある。いずれも直径 8 m、高さ 1.5 m 程の円墳で隣接して存在する。

本墳を含む二つ塚古墳群については、江戸時代の文献を新訂し大正 3 年刊行の『新訂作陽誌』の古跡の所に「二塚」という項目があり、「領家村に在り。周十一間高五尺…」とある^(註5)。二塚といいながら、2 基ある古墳の事を述べてはいないような表現で、周囲が約 19.8 m、高さが約 1.5 m とある記述も、高さ的には 1 号墳のことを指しているようである。ただ、1 号墳にあてはめると周囲の長さは小さいようである。また、昭和 5 年刊行の『岡山県通史』には、久米村（明治 22 年領家村が久米村になる）の「二ツ塚」で「南丘径 40 尺高 5 尺、北丘平夷」とある^(註6)。2 基ある古墳のことを述べており、南丘は 2 号墳の事と思われ径約 12 m、高さ約 1.5 m は墳形・規模が現在のものに近い。また、北丘は 1 号墳の事と思われ、規模の記述はないが平夷とある。平夷とは「平らか」と言う意味なので、現状が方形で上部が平らなため、この事を言っているものと考えられる。昭和 59 年刊行の『久米町史』には、1 号墳一辺 8 m、高さ 1.7 m の方墳、丘陵頂部にあり無傷とある。2 号墳は 1 号墳の近くにあり直径 10 m、高さ 1.5 m の円墳、完形である。3 号墳は丘陵の南西端にある円墳で、直径 8 m、高さ 0.5 m の低い無傷の古墳とある^(註7)。現在の『改訂岡山県遺跡地図』^(註8)も久米町史の記述に準じている。

調査の過程で、地元の人の証言から、この 1 号墳には神社があった事がわかった。複数の証言から牛の神様で当時はにぎわっていたそうである。この神社を調べると「車戸神社」である事が判明し、大正 2 年に麓にある領家の「藤和田神社」に合祀されていた^(註9)（第 3 図左上）。この事から大正 2 年以前は、1 号墳上に社が存在していたものと思われる。

(小郷)

- (註1) a 村上幸雄・橋本惣司1979『稼山遺跡群Ⅰ』（久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（1））久米開発事業に伴う文化財調査委員会
b 村上幸雄1980『稼山遺跡群Ⅱ』（久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2））久米開発事業に伴う文化財調査委員会
c 村上幸雄1980『稼山遺跡群Ⅲ』（久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（3））久米開発事業に伴う文化財調査委員会
d 森田友子・村上幸雄1982『稼山遺跡群Ⅳ』（久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（4））久米開発事業に伴う文化財調査委員会
- (註2) 註1 d
- (註3) 註1 a
- (註4) 岡山県古代吉備文化財センター2003『改訂岡山県遺跡地図第7分冊津山地区』岡山県教育委員会
- (註5) 長尾勝明1914『新訂作陽誌第一巻』作陽古書刊行会
- (註6) 水山卯三郎1990『岡山県通史』
- (註7) 久米町史編纂委員会1984『久米町史上巻』久米町教育委員会
- (註8) 註4
- (註9) 久米郡教育會1923『久米郡誌』久米郡誌刊行会

2. 周辺の遺跡

本2遺跡は直線にして25kmしか離れていない。このため周辺の遺跡をまとめて各時代ごとに概観してみたい。

(縄文時代)

二つ塚1号墳の南東にある宮尾遺跡（第4図137）で晩期の土器^(註1)が、久米川の対岸にある法事坊遺跡（同271）では後・晩期の土器などが出土している^(註2)が、住居跡など遺構検出は見られない。集落遺跡としては、やや離れるが鏡野町竹田遺跡があり早期の住居跡が検出され、土器と石器などの石器が多数出土している^(註3)。

(弥生時代)

二つ塚1号墳の南、中国自動車道建設に伴い調査された頬家遺跡（同135）がある。堅穴住居跡、土壙などが検出され中期後半から後期の集落である^(註4)。また、ゴルフ場建設により調査された猿山遺跡群があり、法事坊遺跡（同271）、釜田遺跡（同485）、稼山遺跡（同395）、荒神遺跡（同449）があり、主に中期から後期にかけての集落遺跡である^(註5)。倭文川の南側で圃場整備により調査された曾根田遺跡（同651）、稗田遺跡（同653）、久保田遺跡（同654）、隠地東遺跡（同618）があり、曾根田遺跡は環濠の可能性がある溝を伴う中期の集落である^(註6)。

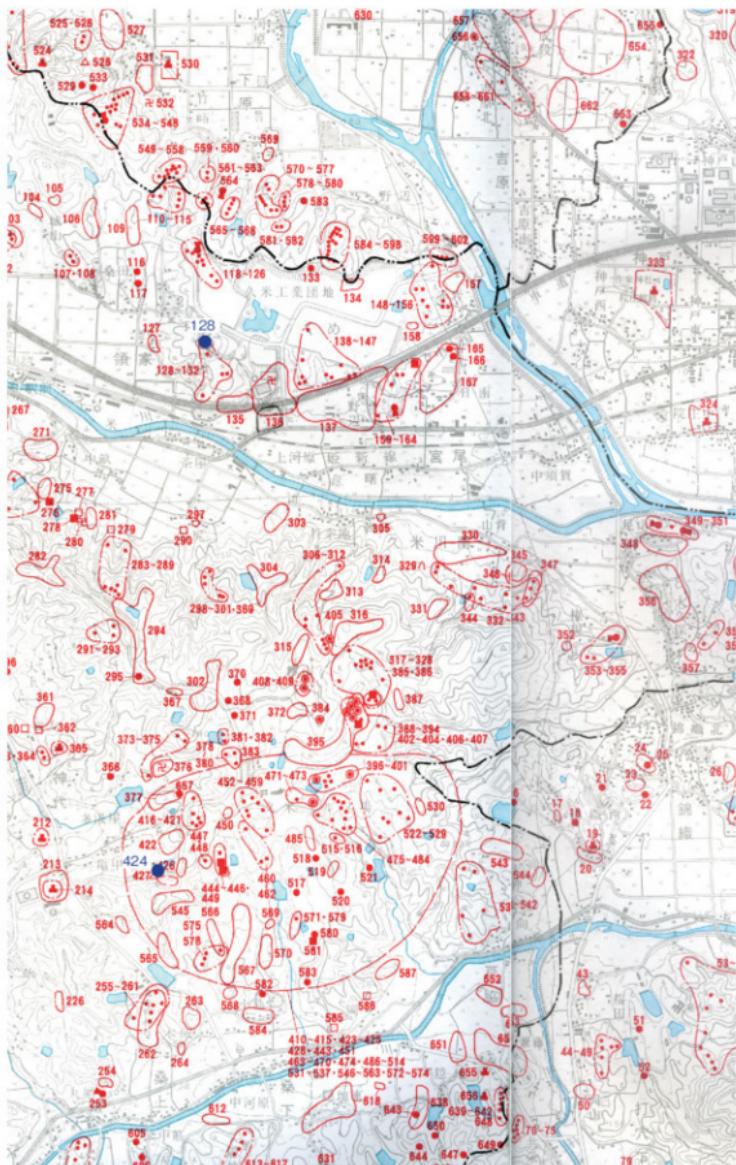
(古墳時代)

前期古墳としては、二つ塚1号墳の北、鏡野町側に郷親音山古墳（同鏡野町564）があり、古くからの存在が知られ報告されている。測量調査から全長43mの前方後円墳で三角縁四神四獸鏡を含む3面の鏡、鉄劍1、鉄鎌が出土している^(註7)。吉井川と久米川の分岐部分の南側丘陵突端には狐塚古墳（市指定史跡、同355）があり、全長55mの前方後円墳である^(註8)。

中期古墳としては、三成古墳（国指定史跡）があり全長35mの前方後方墳で、埋葬施設はいずれも箱式石棺で、後方部・前方部の墳頂に1基ずつと、後方部墳丘に3基の計5基が検出された。副葬品は後方部墳頂の箱式石棺から仿製変形四獸鏡1面、鉄劍、鉄斧、鉄鎌、ヒスイ製勾玉が、くびれ部から土師器などが出土している^(註9)。大日古墳（大日1号墳、市指定史跡、同159）は一辺28m、高さ5mの方墳で、埋葬施設は小石室で、出土遺物は刀・玉類が出土したと伝えられている^(註10)。

後期古墳としては、二つ塚1号墳の北側で産業団地造成に伴い、登船1・2号墳（同118・119）が調査され、1号墳から須恵器・馬具・鉄器・玉類などが、2号墳からも須恵器・鉄器・玉類などが出土している^(註11)。また、3号墳（同120）は全長35mの前方後円墳で、円筒埴輪が採集されている^(註12)。ゴルフ場建設に伴い調査された、稼山古墳群では石ノ才2号墳（同453）、芦ヶ谷古墳（同515）など17基の古墳が調査された。埋葬施設は1基が箱式石棺以外は横穴式石室で、石棺に陶棺を用いているものがあり、副葬品に須恵器、鉄器、玉類、馬具以外に鉄滓が見られるものが多い^(註13)。三成古墳の東には鴻の池2号墳があり全長35m、高さ3mの前方後円墳で、陶棺片が採集されている^(註14)。横穴式石室をもつ前方後円墳の諸例で、美作地方最後の前方後円墳である。また、二つ塚1号墳の東側久米産業団地造成に伴い彼岸手5号墳（同142）が調査され、横穴式石室から須恵器・耳環が出土している^(註15)。

大蔵池南2号鉄穴流し遺構に隣接する大蔵池南製鉄遺跡^(註16)（同427）は、製鉄炉や作業台、廃滓場からなる作業面が複数検出され、鉄滓、炉壁片、須恵器、土師器が出土し6世紀後半まで遡る可能性がある美作最古の製鉄遺跡である。



第4図 周辺遺跡分布図 (128:二つ塚1号墳 424:大蔵池南2号鉄穴流し遺構)

(古代)

二つ塚1号墳の南東700mには中国自動車道建設に伴い調査された宮尾遺跡^(註17)(同137)、その西に隣接して久米庵寺^(註18)(同136)がある。前者は溝や横により方形に区画された中に建物群が存在し、時期は7世紀末~9世紀のI~IV期に分けられる。本遺跡は久米郡衙と推定される。後者の久米庵寺は、塔跡の東に金堂跡、西に講堂跡を配置する伽藍で、出土遺物として瓦以外に塑像仏、埴輪、青銅製相輪などがある。

(中世以降)

吉井川の左岸には美作の守護所とされる院庄館跡(国指定史跡、同323)があり、当時の土塁が残り、井戸などが検出されている^(註19)。院庄館跡の南には、構城跡(同324)がある。本丸と伝わる高台があり、堀がめぐっていたとされるがすべて埋められている。最近の調査でその堀の一部が検出されている^(註20)。久米川の右岸、鶴山山塊の北端に円光寺というお寺があり、この裏山に円光寺裏山経塚群(同276)がある。経塚は10数基あったとされ、墓地造成時に壺(焼き物名不明)とその中に入っていた青銅製の經筒、摺鉢、青白融合子などが出土している^(註21)。

今回調査した大蔵池南2号鉄穴流し遺構周辺には、同様な遺構が数多く存在する。これら鉄穴流し遺構は出土遺物がほとんど無く、時期は明瞭でないが近世頃のものと思われる。

(小郷)

- (註1) 橋本惣司・岡田博ほか1973「宮尾遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4」岡山県教育委員会
- (註2) 村上幸雄・橋本惣司1979「稼山遺跡群Ⅰ」(久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1))久米開発事業に伴う文化財調査委員会
- (註3) 土居徹1986「竹田遺跡」「岡山県史考古資料」岡山県史編纂委員会
- (註4) 萩野克己・山廢康平ほか1975「領家遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8」岡山県教育委員会
- (註5) 訂2
- (註6) 仁木康治2005「曾根田遺跡・半太遺跡・稗田遺跡・久保田遺跡」「久米町埋蔵文化財発掘調査報告」久米町教育委員会
仁木康治2006「せんご遺跡・隱地東遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第77集」津市教育委員会
- (註7) 梅原末治1938「美作村觀音山古墳」「近畿地方古墳墓の調査3」(日本古文化研究報告9)日本古文化研究所
濱・哲夫1990「美作の鏡と古墳」津山郷土博物館
行田裕美2000「郷観音山古墳」「鏡野町史考古資料編」鏡野町史編集委員会
- (註8) 澤田秀実2000「孤塚古墳」「美作の首長墳」(美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究I)吉備人出版
- (註9) 柳崎昭彦ほか1979「久米三成4号墳」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告30」岡山県教育委員会
- (註10) 久米町史編纂委員会1984「久米町史上巻」久米町教育委員会
- (註11) 古代吉備文化財センター2003「改訂岡山県遺跡地図第7分冊津山地区」岡山県教育委員会
- (註12) 仁木康治2000「登島3号墳」「前方後円墳集成補遺編」山川出版社
- (註13) 村上幸雄1980「稼山遺跡群Ⅱ」(久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2))久米開発事業に伴う文化財調査委員会
- (註14) 訂13
- (註15) 訂11
- (註16) 森田友子・村上幸雄1982「稼山遺跡群Ⅳ」(久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4))久米開発事業に伴う文化財調査委員会
- (註17) 訂1
- (註18) 萩野克己1973「久米庵寺」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4」岡山県教育委員会
- (註19) 河本清1974「史跡院庄館跡発掘調査報告書」津市教育委員会
行田裕美1981「史跡院庄館跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第7集」津市教育委員会
- (註20) 平成19・20年度津市教育委員会が確認調査を実施。
- (註21) 訂13

II. 調査の経過

1. 調査に至る経過

(大蔵池南2号鉄穴流し遺構)

平成19年8月9日、津山市水道局より倭文配水池建設に伴う埋蔵文化財の協議があつた。造成計画地を遺跡地図に対照した所、周知の埋蔵文化財である「大蔵池南2号鉄穴流し遺構」に該当しているようであり、造成平面図（第5図上）の等高線を見ると、造成部分の等高線に不自然な落込みが数箇所見られた。後日現地を確認した所、この落込みが遺構そのもので、本遺構の始まり部分と判明した。この始まり部分全域が造成予定地に該当しており、工事は掘削を伴うため、遺構の保存ができないと判断された。このため、再度協議をおこない、工事着手前に全面調査をおこなう事で水道局側と同意した。

平成19年12月5日付けで、水道局事業管理者坂本隅夫から埋蔵文化財調査の依頼書が提出され、平成20年1月7日付けで埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書を締結し、調査にはいった。尚、平成19年12月18日付けで水道局より埋蔵文化財発掘の通知が岡山県教育委員会教育長宛に提出され、平成20年1月10日付けで津山市教育委員会より埋蔵文化財発掘調査の報告を県教育委員会教育長宛に提出した。

尚、調査面積は615m²である。

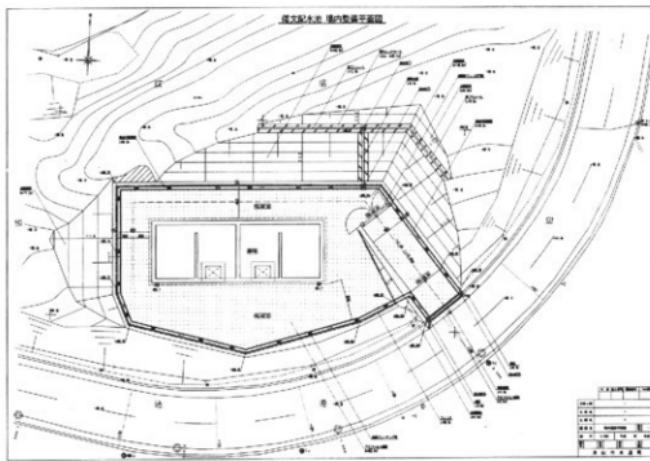
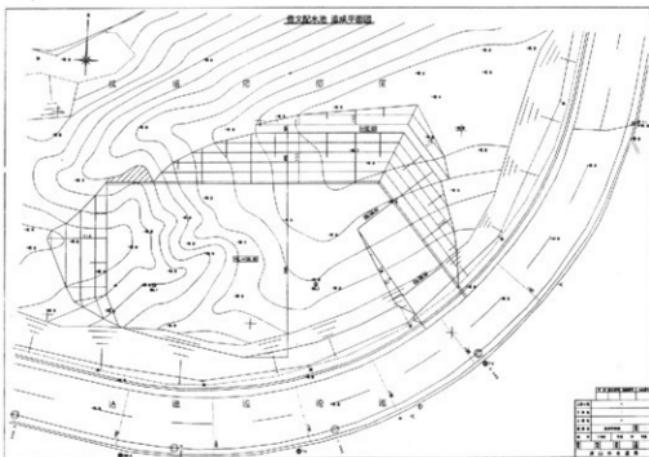
(二つ塚1号墳)

平成20年3月6日、水道局より久米工業団地内の配水池建設に伴う埋蔵文化財の協議があつた。建設予定地を遺跡地図で確認した所、周知の埋蔵文化財である「二つ塚1号墳」に該当しているようであり、計画平面図や縦横断図を見ると、計画予定地内に高まりが見られる（第6図下②-②縦横断図参照）。現地確認の結果、本古墳全域が造成予定地に該当しており、工事は掘削を伴うため、古墳の保存は無理と判断された。このため、再度協議をおこない工事着手前に全面調査をする事で、水道局側と同意した。

平成20年3月7日付けで水道局事業管理者から埋蔵文化財調査の依頼書が提出され、同4月7日付けで埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書を締結し、調査にはいった。尚、平成20年3月7日付けで水道局より埋蔵文化財発掘の通知が岡山県教育委員会教育長宛に提出され、平成20年4月24日付けで津山市教育委員会より埋蔵文化財発掘調査の報告を県教育委員会に提出した。

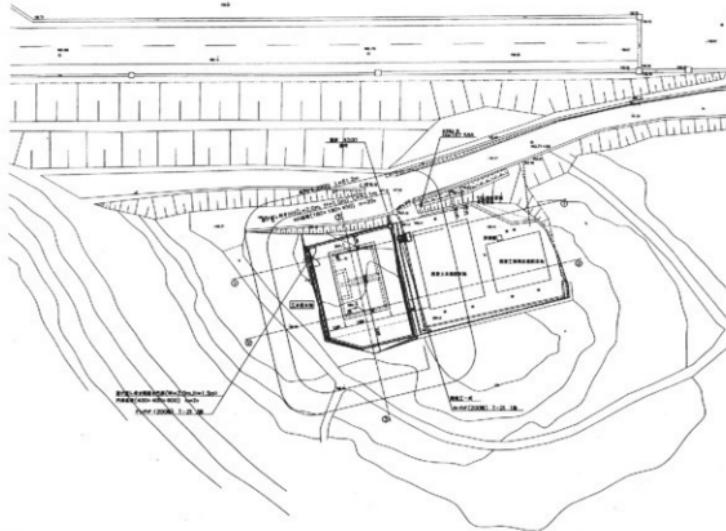
尚、調査面積は143m²である。

（小郷）

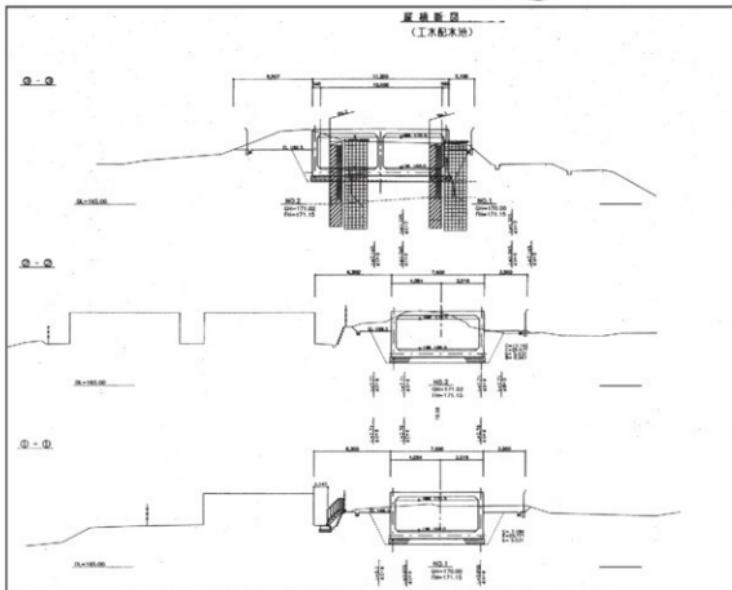


第5図 倭文配水池造成平面図、場内整備平面図 ($S = 1 : 400$)

計画平面図
(工水配水池)



断面図
(工水配水池)



第6図 工水配水池計画平面図 ($S = 1:800$)、縦横断図 ($S = 1:400$)

2. 調査経過

(大蔵池南2号鉄穴流し遺構)

平成20年1月7日（火） 調査準備（～8日）

1月9日（水） 機材搬入および調査用テントの設営、調査地の落ち葉除去。

1月10日（木） 調査地の斜面上部（北東）から腐植土剥ぎ開始。同時に遺構検出作業
（～2月20日）。

2月21日（木） ラジコンヘリによる航空写真撮影。

2月22日（金） 測量作業開始（～3月4日）。

3月18日（火） 機材搬出。テント撤収。調査地で採取した土から砂鉄を探る作業
（～31日）

（豊島）

(二つ塚1号墳)

平成20年4月22日（火） 調査前の地形測量をおこなう。

4月23日（水） 古墳の表土除去を人力でおこなう。

5月8日（木） 表土除去後の地形測量をおこなう。中心部の掘り下げをおこなう。

5月19日（月） 上層遺構の貼り石を測量する。

5月26日（月） 全景写真の空撮をおこなう。墳丘を断削る。

5月29日（木） 下層遺構を確認し掘り下げる。

6月2日（月） 下層遺構を実測する。

6月3日（火） 調査が終了し、機材の搬出をおこなう。

その後、両遺跡の遺物整理等をおこない、本報告書を作成した。

（小郷）

3. 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は以下の通りである。

津山市教育委員会 教育長 藤田長久

教育次長 田口順司（平成19年度）

國藤義隆（平成20年度）

文化課長 湊 哲夫（平成19年度）

文化財課長 中山俊紀（平成20年度、同年度から文化課が文化財課に）

文化財センター 所長 中山俊紀（平成20年度から文化財課長が兼務）

次長 下山純正（平成19年度）

行田裕美（平成20年度）

主任 小郷利幸（二つ塚1号墳調査担当）

主任 豊島雪絵（大蔵池南2号鉄穴流し遺構調査担当、

現文化振興課郷土博物館主任）

整理作業 野上恭子、岩本えり子、田渕千香子

発掘作業は社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。

(敬称略)

(大蔵池南2号鉄穴流し遺構)

内田英文、坂手隆文、鈴鹿順一、高畠貞男、竹花 修、田渕治平、蓬郷賢太郎、藤島 進、

(二つ塚1号墳)

石本寛治、稻垣精一、木下益徳、光岡平八郎、宮崎健二、山本 満

尚、発掘調査から報告書作成にあたり、文化財センター職員の方々及び下記の方々にお世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。

フジテクノ有限会社、株式会社オーエスエー、兵庫スカイ・フォトサービス、岩美町教育委員会、鳥取市教育委員会、鳥取市埋蔵文化財センター、乾 貴子、井上悦甫、小山統道、小山聰富、谷口恭子、神谷伊鶴、山田克己

(小郷)

III. 調査の記録

1. 大藏池南2号鉄穴流し遺構

今回の調査は配水池の築造に伴うもので、予定範囲のうち、鉄穴流し遺構と推定される部分について実施した。対象面積は615m²である。従来調査対象地内に埋蔵文化財包蔵地とされていた遺構は1箇所であったが、調査前に踏査をしたところ、斜面の北側と南側にそれぞれ1条ずつの溝が存在し、下部で1条になることが確認されたことから、鉄穴流し遺構は1基ではなく、2基あったと考えられる。

このことから、調査は2基の溝状遺構を中心に実施した。調査前の状況はマツを中心とした森林であり、樹木の伐採後、長年の間に厚く堆積した落葉を取り除く作業からはじめた。落葉を除去したところ、2条の溝状遺構がより鮮明になったが、2条の溝状遺構の間にあたる部分は非常に急な崖のような状態であったため、一部土砂が崩落しており、花崗岩の岩盤が露出していたところもみられた。

その後は斜面の上部から順に腐植土を取り除き、地山を検出する作業にとりかかった。溝内の土の堆積状況を調べるために、2条の溝状遺構の上部と下部にそれぞれ2箇所ずつ、合計4本の土層観察用アゼを残した。2条の溝状遺構は北からA遺構、B遺構とした。

A遺構とB遺構は斜面の下で1条の溝になっており、この溝は調査区の外、つまり西側に延びていたと考えられるが、実際には調査区西側は長年の雨水等により土砂が流れしており、明確な遺構のラインを把握することはできなかった。そのため第7図では、溝の下手のラインを点線で示した。

(1) A遺構

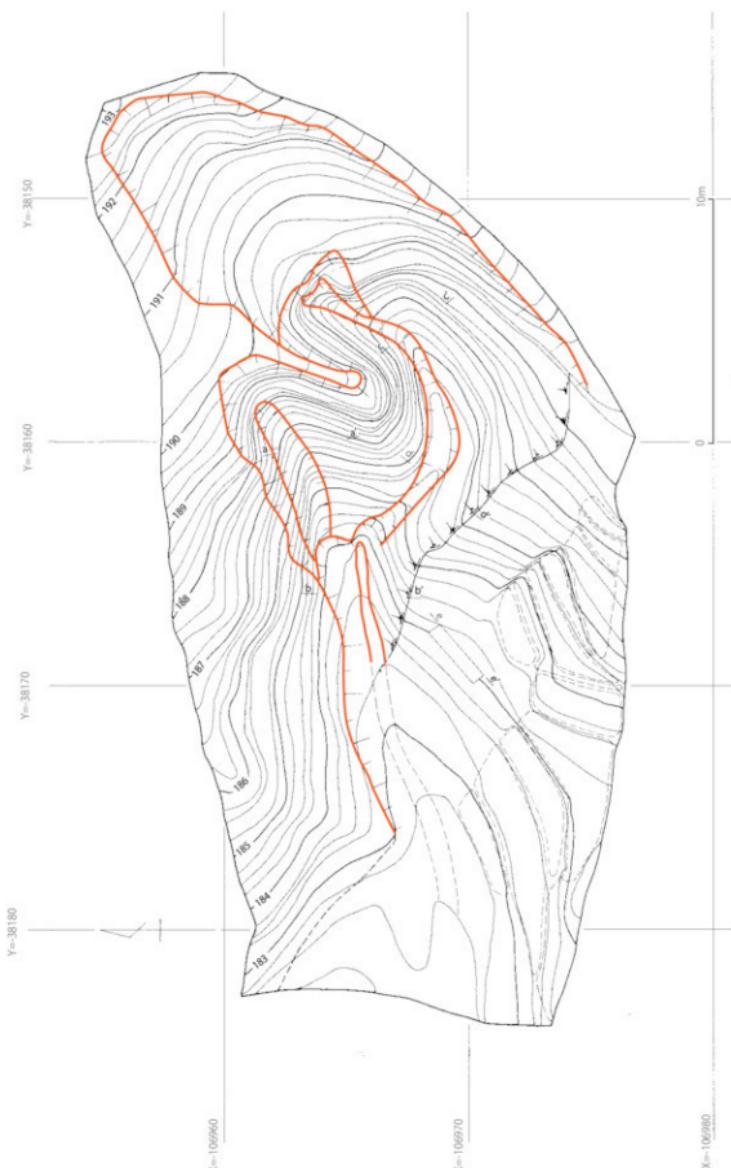
長さ約20m以上、幅2~6m、比高差約7mをはかる溝である。先述のように、斜面の下部にあたる西側部分には明確な溝はみられない。溝の中段、標高187m~188m付近で若干幅の広い平坦部がみられたことから、この部分に土層観察用のアゼを残し、石堤等の施設がある可能性を考えたが、第8図土層断面図a-a'にみられるように、上からの地山の流土および旧表土が20cm程度堆積しているのみであり、鉄穴流しに関係する施設はみられなかった。さらに、溝の下部にあたる標高183.5~184m付近にも同様に土層観察用のアゼを残したが(同b-b')、ここでも表土の直下で地山が検出された。

遺物は全く出土していない。

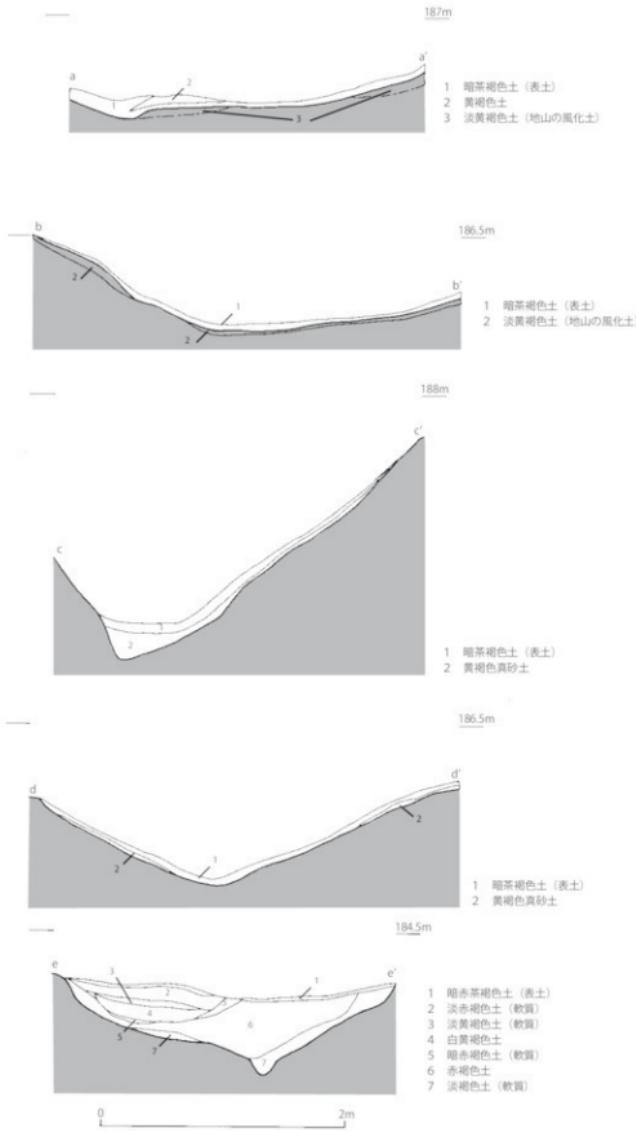
(2) B遺構

長さ約30m以上、幅6~8m、比高差約10mをはかる溝である。上部は北東から南西方向へ傾斜し、溝の中段、標高187.5m付近で角度を西側に変え、さらにその1m下で北に大きく曲がってA遺構と合流する。溝の中段部分に長さ3m程度の平坦地があることから、土層観察用のアゼを設定したが(第8図土層断面図c-c')、表土の直下で地山の花崗岩が風化した砂層が検出された。また、溝状部分の最下部、A遺構との合流地点直前部分においても、表土が10cm程度堆積しており、その直下で風化花崗岩および花崗岩の岩盤が検出された。

また、A遺構とB遺構の合流地点付近にも土層観察用のアゼを設定し(同d-d')、2つの溝の切り合い関係の確認に努めたが、表土の下は花崗岩の地山であり、A遺構とB遺構との新旧関係を確認す



第7図 大蔵池南2号鉄穴流し造構平面図 ($S = 1 : 200$)



第8図 土層断面図 ($S = 1 : 40$)

ることはできなかった。

B 道構の溝の南側は、小型の重機が通る幅の道が造成されており、その西側は、階段状に造成されていた。前者の小規模な道については、大蔵池南製鉄遺跡の発掘調査の発端となった道路の建設および製鉄遺跡の保存のための工事にともなって造られたものと推測される。後者の階段状の造成部分については一部にレンチを設定し、土層の確認に努めたが、時期の特定にはいたらなかった（第8図土層断面図e-e'）。

B 道構についても遺物は全く出土していない。

その他、調査区北西部、A 道構の溝の北斜面付近で、茶碗の破片やプラスチック製の椀が出土した。これらの遺物は道構に伴わないものである。

（3）鉄穴流し実験

今回の調査では、調査区内の5箇所でサンプルとなる砂を採取した（第9図A～E）。採取地点は、A道構の傾斜変換部付近（A）、B道構の傾斜変換部付近（B）、南側の階段状に整地された地点（C）、A道構の下部北斜面（D）、A、B道構の合流地点付近（E）である。砂は各地点で土のう袋10袋ずつ採取した。1袋あたりの重量は約13kgである。砂鉄の採取方法は、以下の手順で行った。

- ①土のう袋を1袋ずつふるいにかけ、粗い石などを取り除く。石が取り除かれた砂の重量は約半分の6.5～7.2kg程度となる。
- ②長さ3mの雨どいを2本連結させ、傾斜をつけて設置する。
- ③雨どいの上部から水を流し、ふるいにかけた砂を移植ゴテで少しづつ流していく。比重の軽い砂は下流へ流れ、比重の重い砂鉄のみが途中に残留する。この作業を繰り返し行う。

上記の方法により砂鉄を採取したところ、次のような結果を得た。



第9図 鉄穴流しサンプル砂採取地点

鉄穴流し実験の精度の問題もあるが、この結果からは、B地点およびC地点の砂鉄量が他と比較するとやや多い値を示しているが、調査区全体としては、わずかな量であり、最も採取量の多かったC地点のおおよその割合をみても、0.003%程度である。後述するが、近世の鉄穴流しでは、切り崩した土砂の量に対する採取される砂鉄の量は0.4%程度であったとされており、採取された砂鉄の量から判断すれば、この地は砂鉄の採掘場としては適当な場所であったとは言い難い。

2. 二つ塚 1号墳

(1) 調査前の状況（第10・11図）

二つ塚1号墳は、標高171m程の丘陵頂部に位置している。調査前の測量図を見ると、東西9m、南北75m、高さは東側で1.1m、西側で2m程の長方形状の形態を呈し、墳頂部は東西4m、南北3.5mのややいびつな方形で、ほぼ平らだが東側がやや高い。高さが東西で異なるのは、南西側の平野部を意識した立地のためとも推測される。また、本墳の東側には隣接して既存の配水施設があり、南東13mには2号墳が存在する。この2号墳は墳端がややいびつであるが直径10m、高さ1m程の円墳のようである。両墳とも最高所が標高171m台であるが、1号墳の方が現状ではやや高い。既存の配水施設はこれら古墳をさけて設置されている。また、1号墳の西から2号墳の南側にかけて山道が通っている。

また、1号墳の表面には石が多数見られ、葺石とも思われた。ただ、周囲には車戸神社に伴うものと考えられる陶磁器類もわずかに散見される。また本古墳上にも石が東側でまとまって露出している。調査後に車戸神社を書いた絵図が存在^(註1)（関連資料第24・25図参照）する事がわかった。1枚は周辺を含めた切絵図のようで、それによると鳥居が道側に描かれており、別の図では墳丘の短辺側に拝殿がありその奥に鳥居と登り口が描かれ頂部の奥に社がある。これら図が正しいとすると、絵図の道は現在ある道と考えられ、現状の墳丘が長方形である事から、墳丘の西側の道側に鳥居が在り、頂部東側に社が存在していた事になる。この場合頂部の石は社の基礎とも考えられる。墳丘の西側には大きなくぼみが1箇所あり、このくぼみから北側に向かって道路側がコの字形に大きく削られ、一段低くなっている事から、この部分は土取りが大規模におこなわれているようである。これについては、神社と関係があるのか、現状では明瞭でない。

（註1）第25図は寄託されている領家村文書。所有者の小山統道氏に掲載の許可を得ている。年代の明記は無いが、明治初年頃のものと思われる。第24図については、所有者は不明で、年代は明治初年頃と思われる。

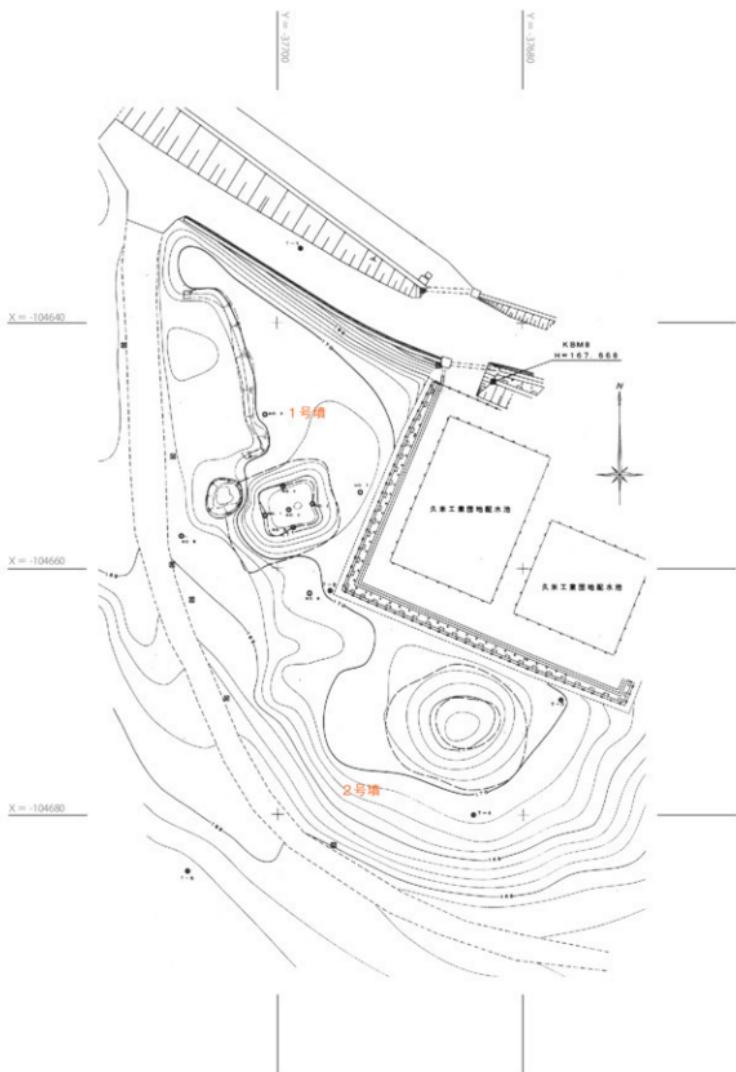
(2) 土層（第12図）

第12図に墳丘を断ち割った土層図を載せている。上が東西、下が南北土層である。土層の詳細を検討した結果、古墳の上に上層遺構、下に下層遺構が存在する事が判明した。

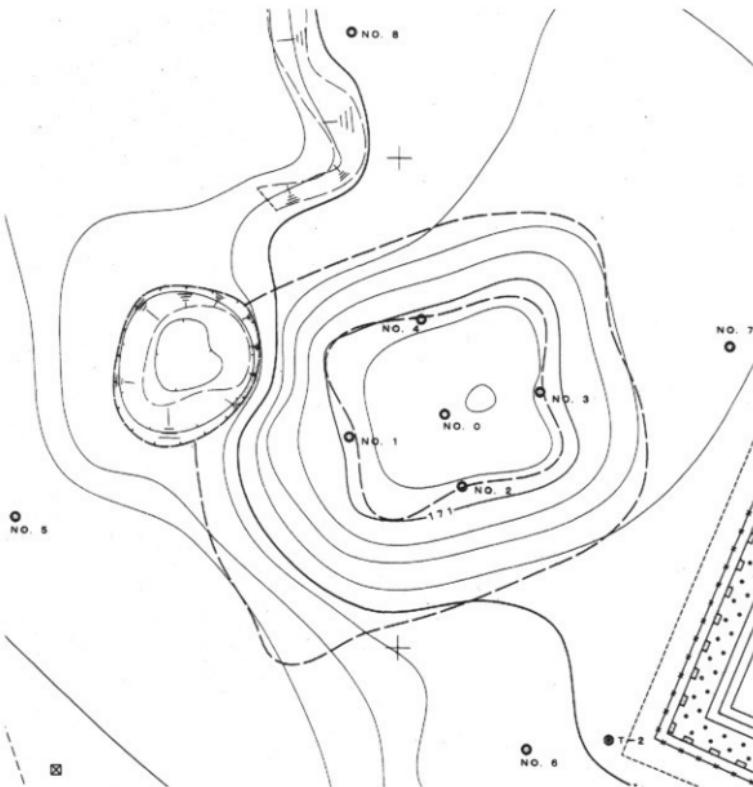
土層1・2が上層遺構に伴うもので、ほぼ地山などによるもので、ブロックをほとんど含まない単層ではほぼ水平に積まれている。これは周囲の盛土や地山などを削って盛ったものと推測される。墳丘斜面に見られた石は本遺構に伴うものと考えられる。さらに、西側以外は土層4を階段状に掘り込んでいる。この部分に石や礫が多量に見られ（土層10）、これらは上層遺構に伴う流れ込みである。

土層4～6が古墳に伴う盛土である。南北はほぼ1層で、東西では分層できる箇所もある。地山や旧表土のブロック土が顕著に見られる層はない。また土層3は、盛土の土層4を上から掘り込んでいるもので、当初埋葬施設と考えたが、これは北西側などから掘り込まれた穴で、内部から破壊された須恵器や石などが出土する。この事から、埋葬施設では無く古墳に掘り込まれた破壊穴である。このため上層遺構が造られる前にこの破壊穴は掘られたようである。また、土層観察のほか平面的にも精査したが、埋葬施設の痕跡は見られなかった。

土層7は旧表土の淡黒灰色土で、その下の土層9が下層遺構の埋土である。内部から弥生土器・炭が出土する。



第 10 図 二つ塚 1 号塘調査前周辺地形測量図 ($S = 1 : 400$)



第11図 二つ塚1号墳調査前平面図 ($S = 1 : 100$)

また、土層12は古墳の周溝ではなく、出土遺物から上層遺構に伴うものと考えられる。

(3) 上層遺構 (第13～15図)

表土を除去すると、周囲の地山を整形した東西10.7m、南北8.4mの長方形形状の高まりが検出され、高さは東側では1m、西側では2mを測り、西側がかなり高く作られている事がわかる。墳端は地山を整形しているが、墳端ラインを見ると南東隅の角は無く、弧を描いている。このため墳端は明瞭な方形ではない。表面には西側を中心に石が多数見られる。また、土層から西側以外は、墳丘を階段状に1段カットしており、この部分から石片が多数出土している。

第13図は西側の石の出土状況の平面図で、第14図はその立面図である。残存状況は良くないが、平面図を見る限りでは墳頂部南側付近などで石が重なっている部分もあるが、立面図を見る限りではどちらかというと面上に石が貼られているようである。検出時にも転落石が多く見られた事から、かなり密に貼られていた事が推測される。これら石は山石がほとんどで、中にはかなり砕けているものもある。

当初これを古墳の葺石と考えたが、神社があったという地元の証言や、石の間から瓦や陶磁器が出土する事から、本遺構は神社に伴うものと判断される。また、絵図（関連資料第25図）や文献^(注1)によれば、墳丘斜面に石垣や玉垣があった事がわかり、さらに鳥居側の西側には上の階段部分が描かれている。現状ではこの部分に石がほとんど存在せず、スロープ状になっている。この部分に石段があったのか、階段状に掘られていただけであったのか、現状では判断し難いが、掘りくぼめて石を配置していた痕跡がほとんど無い事から、後者であった可能性が大きい。さらに墳丘上の東側には大きめの石がかなり見られ、現状でやや高くなっている。ただこれら石は不規則なもので、絵図ではこの部分に社が描かれている。このためこれら石は基礎と推測される。ただ、その場合基礎の残骸でかなり破壊を受けていると考えられる。さらにこの石の周囲や墳端付近から古銭が複数出土している。

また、東側墳端外で検出した溝は、幅0.8～0.9m、深さ8cmを測る浅いものである。この溝を当初は古墳の周溝と考えたが、東端部から北東方向に続くもので、出土遺物も陶磁器類である事から、古墳の周溝ではなく神社へ来るための道のひとつと考えられる。ただこれについては、絵図にも描かれておらず詳細は不明である。

西側墳端部分の掘り込みは南北2箇所あり、いずれも地山を大きく掘り込んでいる。掘った土は周囲に置いているようである。これにより貼り石の一部がかなり破壊されている。絵図にはこの部分に鳥居が描かれているため、この掘り込みは神社移転の際に鳥居を抜いた痕跡と考えられる。

出土遺物は、墳丘検出時に墳丘部分やその周囲から瓦、陶磁器類が出土し、古銭が墳頂部及び斜面から計17枚出土している。これら古銭の出土状況から神社の賽銭的なものがほとんどと思われるが、墳頂部のものにはかなり深い位置から出土するものもあり、地鎮的なものも含まれると思われる。

（註1）関連資料の第25図の平面図には、関連する文書がある。今回はこの解説を掲載していないが、文面から「石垣」・「玉垣」が有ることがわかる。文書の解説は乾貴子氏にお世話になった。

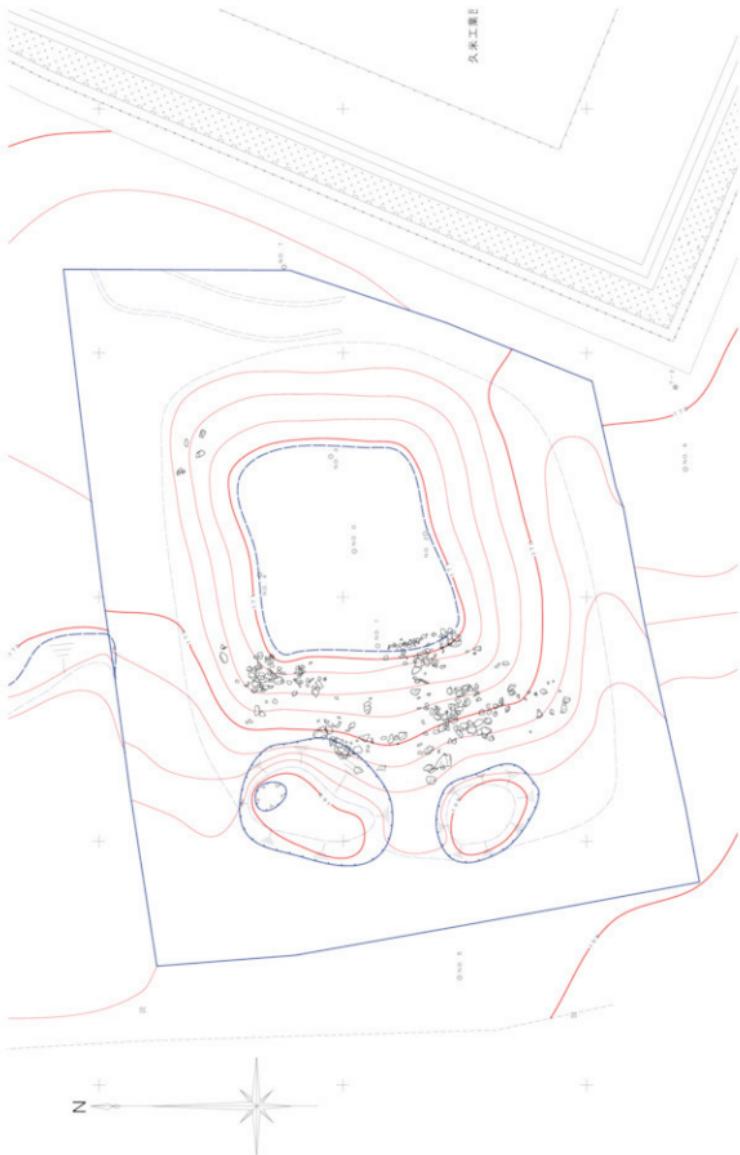
（4）古墳（第16～18図）

a 墳丘・規模（第16図）

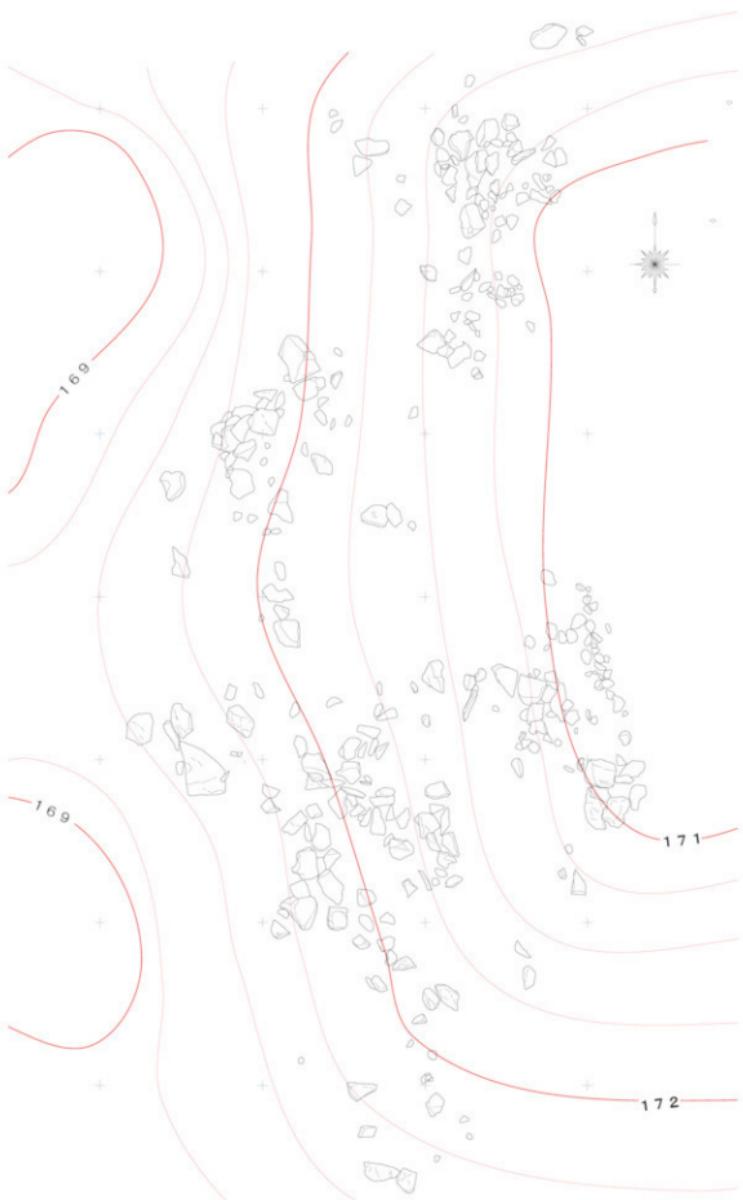
墳丘の上部及び周囲が上層造構により削平され、特に西側以外は階段状に大きく削られている。現状で盛土部分のみを測ると東西8m、南北5mを測る長方形である。また周溝は見られない。ただ周囲は上層造構築時に大きく削平されていると考えられるため、周溝そのものも削られた可能性も否めない。ただ頂部の立地のため周溝そのものが存在しなかった可能性もある。このため、墳端をどの位置で捉えればよいか、現状では明確でなく、墳形・規模等の詳細は不明である。また、墳丘の四隅にもトレチを入れて土層を確認した。その結果、北東（g-h）と南東（i-j）トレチで旧表土を確認している。この旧表土や盛土の状況から少なくとも8m以上の古墳である事は確かである。

b 埋葬施設（第17・18図）

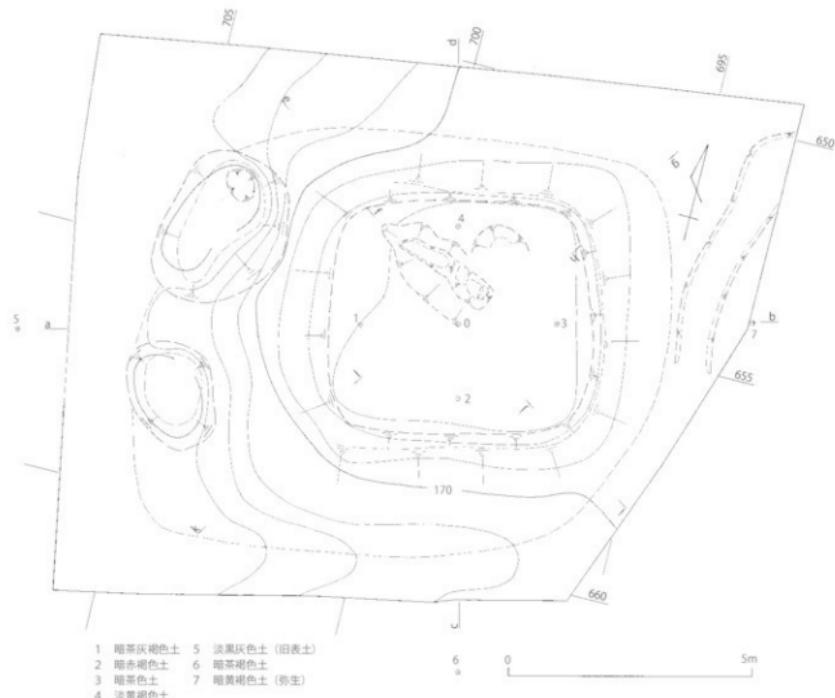
墳丘上には北や北西方向からの破壊穴が存在する。この破壊穴は北西方向のもので長さ2.6m、幅1.3m、深さは最大で0.84mを測る不正形のものである。北側のものは、一部のみ検出しており幅1.1m、長さ0.4mを測る円形のようである。第17図が破壊穴内の遺物の出土状況である。北からの破壊穴からは須恵器・鉄器・石、北西からの破壊穴からは須恵器・石が出土し、北西のみ中心部付近を深く掘り下げているようである。第18図は北西方向の断面図であり、これを見ても不規則に掘り込んでいる事がわかる。さらに須恵器や石のレベルを見てもかなりの差が見られることから、これら出土遺物は2次



第13図 上層遺構平面図 ($S = 1 : 100$)

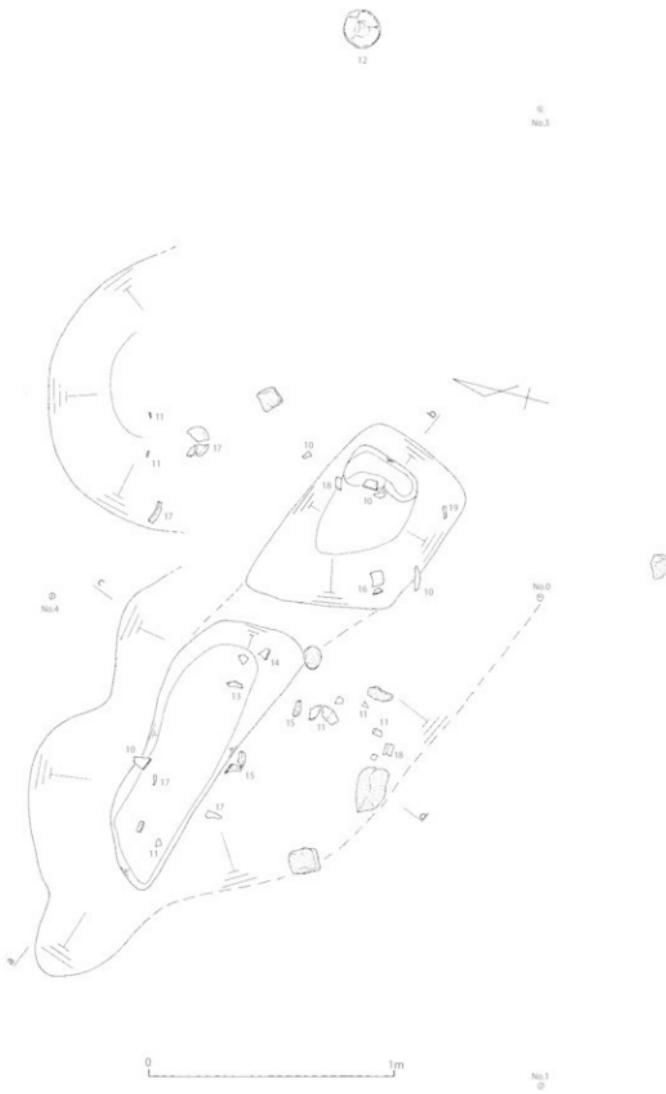


第14図 上層構造石平面図 ($S = 1 : 30$)

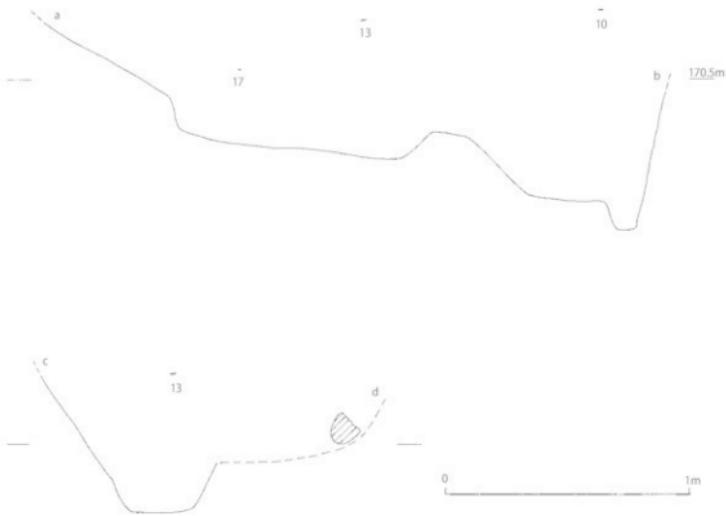


第16図 二つ塚1号墳埴丘測量図・土層図 ($S = 1 : 100$)

的に動いているものと思われる。これら破壊穴以外には遺物の出土は無く、平面的に精査をおこなったが埋葬施設の痕跡は一切見られない。おそらくこの破壊時や上部の削平時などに、埋葬施設は跡形も無



第17図 遺物出土状況平面図 ($S = 1 : 20$)



第18図 遺物出土状況断面図 (S=1:20)

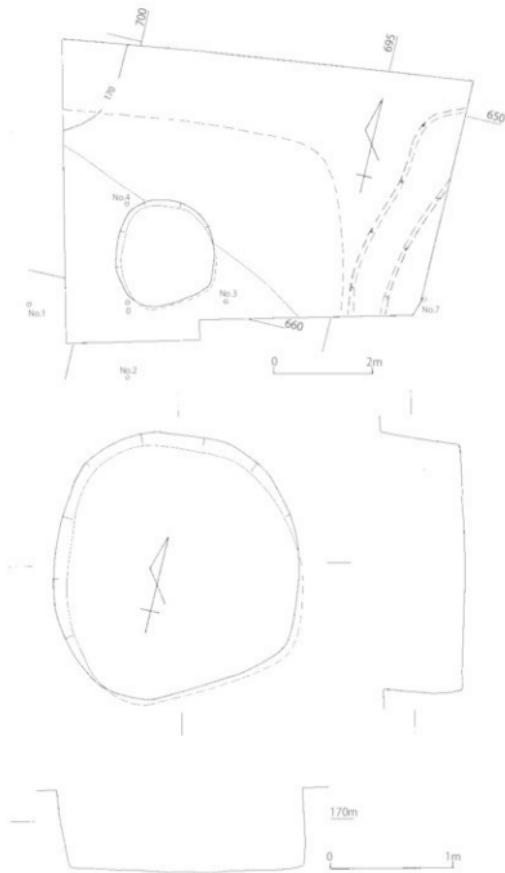
く破壊されたものと考えられる。出土遺物は主に破壊された須恵器と鉄器1点、石6点である。須恵器、鉄器は副葬品などで、出土した石は、上層遺構の周囲で使用された山石以外に河原石も4点見られる事から、埋葬施設に伴うものと判断される。ただこれら石は比較的小さいものが多く、数が少ないことから、堅穴式石棺などの石材ではなく木棺の材を支えていた石や枕石などと思われる。このため、埋葬施設は木棺直葬と推測される。出土した須恵器はかなり広範囲のものが接合するため、大規模な破壊がおこなわれたことは確かである。遺物の番号は、第20・21図の番号で同一のものは接合したものである。例えば11は須恵器の杯蓋で北側の破壊穴と北西側の破壊穴のものが接合する。17は杯身で同様に離れた破片が接合する。12のみ離れて単独で出土し、ほぼ完形の杯蓋が伏せた状態である。出土状況から埋葬施設の可能性も考えたが、これ以外に出土遺物は無く、埋葬施設の痕跡は見られない。また、位置的にも埴丘の端部分であるため、埋葬施設に伴うものとは考えられない。

c 副葬品

出土遺物は、須恵器と鉄器と石である。須恵器のほとんどが小片となっているが、完形に近いもの復元できるものもある。須恵器は杯と甕のみである。鉄器は鉄鏡の破片1点である。

(5) 下層遺構（第19図）

埴丘を断ち割った結果、旧表土層（第12図土層7）が明瞭に見られ、この層やその下の層に弥生土器が見られた。さらに深く埴丘を断ち割った結果、北東側で落込みが検出され、弥生土器が出土した。このため、この部分の盛土や旧表土などを除去して下層遺構を検出した。下層遺構としては、中央付近に大きな土壙が1基あるのみである。西側の土層（第12図下段左側）でも旧表土の下で落込みらしきものが見られるが、床面が平らでない落込みで、土器の出土が無いため、自然のものと理解して遺構と



第22 下層遺構位置図 ($S = 1 : 100$)、平・断面図 ($S = 1 : 40$)

しては取り扱っていない。古墳下層の北東側が比較的なだらかなため、遺構の検出をおこなったが、この土壌以外には見られない。

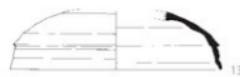
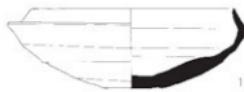
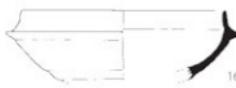
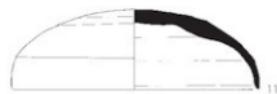
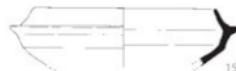
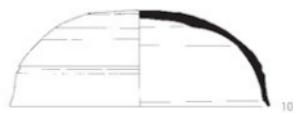
a 土壌（第19図）

長さ2m程の円形土壌で、深さは最大で0.69mを測る。断面は南東側で部分的に袋状を呈する箇所もあるが、その他では袋状を呈さない。床面はほぼ平らで、柱穴などその他の遺構は存在しない。埋土はほぼ1層であるが、上層が暗茶褐色土、下層が暗黃褐色土に近いものようで、明確な分層はできない。内部から弥生土器の破片と炭片が少量出土した。土器は上層部分や床面付近からも出土しているが、いずれも破片で摩滅しているものがほとんどで、完形に復元されるものは無い。また、炭も小片、少量である。

(6) 出土遺物 (第20~22図)

出土遺物として、弥生土器、須恵器、鉄器、瓦、陶磁器、古銭がある。弥生土器は下層遺構（土壤）、須恵器・鉄器は古墳、瓦・陶磁器・古銭は上層遺構（車戸神社）に伴うものである。

a 弥生土器 (第20図1~9)



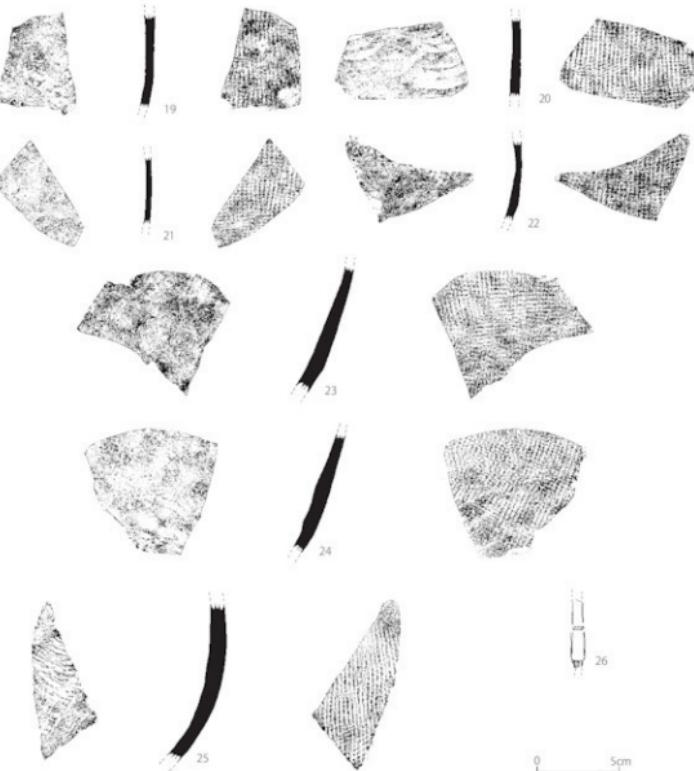
第20図 出土遺物 (1) (1~9···S = 1:4, 10~18···S = 1:3)

1・2は壺の口縁部である。1は口縁部外面には円形のスタンプ文を施し、2の外面には凹線上に円形や棒状の粘土を貼り付けている。3～5は甕の口縁部である。3・4は口縁部外面に凹線を施し、5は屈曲してほぼ垂直に立ち上がる二重口縁である。6・7は底部である。6は表面の摩滅が著しく、7は外面に指頭圧痕が見られる。これらは壺や甕などの底部である。8・9は高杯の杯部である。いずれも口縁はくの字に屈曲して端部を外方につまむ。8はその外面に凹線を3条施している。このほか図示していないが、高杯の長脚部片などがある。

b 須恵器 (第20・21図 10～25)

10～14は杯蓋である。口径は13～15.8cmのもので、天井部の成形が回転ヘラ削りのもの(10・13)とヘラ切り後外周のみヘラ削りをするもの(12)とがあり、11は摩滅のため調整は不明である。また、天井部と口縁部との境に凹線がめぐらしが明瞭に見られるもの(13・14)、わずかに見られるもの(10・12)と無いもの(11)とがある。以上、口径や外面の調整などから複数のタイプが見られる。

15～18は杯身である。口径10～13.8cmで、口縁部の立ち上がりが1cmを超えるもの(15・16)



第21図 出土遺物(2) (S=1:3)

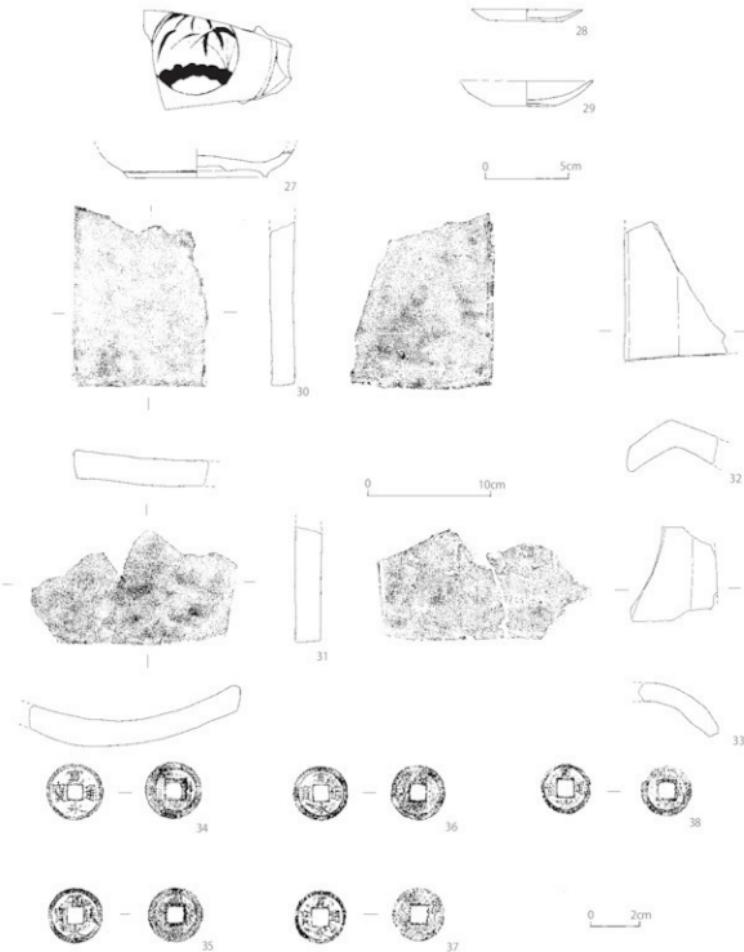
と超えないもの（17・18）とに細分され、底部の成形は回転ヘラ削りのものが大半である（15～17）。

19～25は甕の胴部片である。外面は平行タタキがほとんどで、内面に同心円文が明瞭に見られるもの（20・25）、わずかに見られるもの（24）があり、その他はなで消しているようである。

c 鉄器（26）

26は鉄鎌の破片で、刃部は無い。残長4.1cmを測り、茎部分には木質が見られる。

d 陶磁器（第22図27～29）



第22図 出土遺物（3）（27～29…S=1:3, 30～33…S=1:4, 34～38…S=1:2）

27～29は陶磁器である。27は磁器の皿の底部付近で口縁部は欠損する。蛇ノ目凹形高台、見込みには二重、中央には一重の團線があり、中央の團線内には緋などの染付けがある。また外面にも模様の痕跡がわずかにある。28は備前焼の小皿で破片から復元している。29は釉薬のかかった小皿で、口縁部が一部欠損する。見込みに目跡が2箇所残存する。口縁外面に煤の付着があり灯明皿に使用されたものである。焼き物名は不明である。

e 瓦 (第22図30～33)

瓦は10点ほどありそのほとんどが平瓦で、丸瓦片も数点ある。その内の4点を図示している。30・31は平瓦で32は桟瓦片である。33は丸瓦片である。

f 古銭 (第22図34～38)

古銭は17枚出土し、その内の5枚を図示している。17枚の内1枚判読不能（おそらく寛永通寶）があるが、他すべてが「寛永通寶」である。この内古寛永(1636年初鑄)が2枚(34)確認でき、新寛永(1697年初鑄)も11枚(35～38)確認できる。

(小郷)

番号	出土場所	種別	器形	口径	底径	器高	調整等	色調	その他
1	土壤	弥生土器	壺				口縁外面内形容シ	淡赤褐色	
2	土壤	弥生土器	壺				口縁外面内面に粘土を貼付ける	淡赤褐色	摩滅
3	土壤	弥生土器	壺				口縁外面凹線	赤褐色	
4	土壤	弥生土器	壺				口縁外面凹線	淡赤褐色	
5	土壤	弥生土器	壺				ヨコナデ	赤褐色	
6	土壤	弥生土器	壺 or 壺	(8.0)				赤褐色	摩滅
7	土壤	弥生土器	壺 or 壺	(6.0)			外面指印压痕	赤褐色	
8	土壤	弥生土器	高杯	(26.0)				淡赤褐色	摩滅
9	土壤	弥生土器	高杯					淡赤褐色	
10	破壊穴	須恵器	杯蓋	15.8		5.8	外面天井部回転ヘラ削り他はヨコナデ	乳灰白色	田 No.3・20・22・24接合
11	破壊穴	須恵器	杯蓋	15.2		4.8	外面天井部不明他はヨコナデ	乳灰白色	田 No.2・7・9・12・14・28・29接合
12	破壊穴	須恵器	杯蓋	14.6		4.1	外面天井部回転ヘラ切後外側回転ヘラ削り	乳青灰色	田 No.32
13	破壊穴	須恵器	杯蓋	(13.0)			外面天井部回転ヘラ削り他はヨコナデ	乳青灰色	田 No. 7
14	破壊穴	須恵器	杯蓋				ヨコナデ	乳青灰色	田 No. 9
15	破壊穴	須恵器	杯身	(10.0)			外面底部回転ヘラ削り他はヨコナデ	乳青灰色	田 No.6・11ほか接合
16	破壊穴	須恵器	杯身	(12.4)			外面底部回転ヘラ削り他はヨコナデ	乳青灰色	田 No.30ほか接合
17	破壊穴	須恵器	杯身	12.4		4.8	外面底部回転ヘラ削り他はヨコナデ	乳灰白色	田 No.4・5・26・27接合
18	破壊穴	須恵器	杯身	(13.8)			ヨコナデ	乳青灰色	田 No.14・15・23ほか接合
19	破壊穴	須恵器	壺				外面平行タタキ内面ナデ	乳青灰色	田 No.21
20	破壊穴	須恵器	壺				外面平行タタキ内面同心円文	乳青灰色	
21	破壊穴	須恵器	壺				外面平行タタキ内面ナデ	乳青灰色	
22	破壊穴	須恵器	壺				外面平行タタキ内面ナデ	乳青灰色	
23	破壊穴	須恵器	壺				外面平行タタキ内面ナデ	乳青灰色	
24	破壊穴	須恵器	壺				外面平行タタキ内面同心円文	乳青灰色	
25	破壊穴	須恵器	壺				外面平行タタキ内面同心円文	乳青灰色	
26	破壊穴	鉄器	鉄鋤	長さ41cmの破片					木質有
27	北東区境外	磁器	皿		(8.4)		蛇ノ目凹形高台、見込みに緋などの染付	灰白色	肥前系
28	北東区境外	陶器	小皿	(6.8)	(4.4)	(0.7)		赤褐色	備前焼
29	西側堀頭アゼ	陶器	小皿	8.0	3.4	1.4		暗緑灰色	灯明風
30	南西区斜面石上	瓦	平瓦					黒灰色	
31	南西区斜面石上	瓦	平瓦					黒灰色	
32	南西区斜面石上	瓦	平瓦					乳灰白色	桟瓦
33	南西区斜面石上	瓦	丸瓦					乳灰白色	

第1表 二つ塚1号出土土器類観察表

IV まとめ

1 大蔵池南2号鉄穴流し遺構

大蔵池南2号鉄穴流し遺構の調査では、鉄穴流しの痕跡と推測された部分のすべてについて掘削を行い、遺構の規模、時期、および関連する施設の確認につとめた。

その結果、遺構に伴う遺物や、鉄穴流し遺構内に存在する可能性のある施設として考えられる石堤や石列などはみられず、鉄穴流しが当地でいつ頃操業されていたかなど、不明な点を多く残すこととなった。

稼山遺跡群に存在する鉄穴流し遺構の調査を行った村上幸雄は、溝状遺構が鉄穴流し遺構であるとする根拠として、溝状遺構の分布が、稼山山塊の南斜面の花崗岩地帯に限定されていること、遺構が土砂の採掘、つまり砂鉄の採取が目的であったと考えられること、製鉄に関連した地名とされる「金穴池」、「金鉄場池」、などが稼山山塊とその周辺にみられること、の3点をあげている^(注1)。今回の調査地がこれらの条件に合うことは言うまでもないが、鉄穴流し遺構とするのに否定的な条件を備えていることも事実である。村上は、溝状遺構が鉄穴流し遺構とする否定的条件として、採掘場よりも高位に水源が存在していないことをあげている。採掘した土砂を流すために必要不可欠な水が上部になければ、水を下位へ流すことは極めて困難であるが、今回調査を行った大蔵池南2号鉄穴流し遺構についても、調査地よりも高い位置に水源はない。北側に位置する大蔵池は標高が溝状遺構よりも標高が高い位置にあるため、これについても水源とするには適していないのである。

明治時代に鳥取県の一地域で行われていた鉄穴流しの例を示した俵國一によれば、「砂鉄を含んだ土砂は、採掘場から自然の急傾斜の水路（走）で自然分離され、砂鉄を選別する選鉱場に送られる。選鉱場は、砂溜、大池、中池、乙池、洗桶と呼ばれる複数の選鉱桶があり、そこで比重の違いによる分離操作が繰り返される。大池以上は側面に木杭を打ち込み、芝をならべ、底部は地山のままの溝で、中池、乙池は底部に板を敷く」としている^(注2)。

鉄穴流し遺構を実際に発掘調査した例は少ないが、遺存状況が良好な例として、広島県六の原製鉄跡がある^(注3)。ここでは、2箇所のたたら跡とともに、鉄穴流しの溝状遺構が上手で2本、下手で1本検出されている。溝の両壁には石が積み上げられ、底には板が敷かれている状況が明瞭に残っている。報告書によれば、これらの溝は、選鉱場である池のひとつと考えられている。今回調査を行った溝状遺構は、六の原製鉄場例のように、溝の底部に板が敷かれていた痕跡はない。

1975年～80年にかけて実施された稼山遺跡群に存在する鉄穴流し遺構の調査では、溝の底部に花崗岩の石が溝の底部に集積している状況（石堤）や、溝の底面中央部の地山を高く残し、その高い部分に石を積み並べたもの（石列）などが検出されている。石堤は、一時的に土砂の流れを止め、土砂を人為的に攪拌することによって、砂鉄と土砂の分離を促すためのものと推測され、石列は、土砂の流れの方向を調整するためのものとして捉えられている。部分的な調査であることなどから、明確な用途は不明であるが、今回の調査では、過去の調査例でみられた石堤や石列など、鉄穴流しの手がかりとなるような施設は見つかっていないが、調査地が尾根の頂上付近から標高差8m前後の斜面に位置していることから、俵の示した鉄穴流しの最初の段階である「走」に相当する部分である可能性が高い。つまり、採掘場から選鉱場への導水路と推測される。それ以下の部分については、調査区外であり、削平により地

形が大きく改変されているため、不明である。遺構の時期についても、手がかりとなる遺物が全く出土していないため、近世であるのかそれ以前のものなのかも明確にできない。

砂鉄の採取量についても疑問が残る。近世たたらの状況を詳細に記した下原重沖著『鉄山必用記事』(天明4年)によれば、「およそ砂1升(重量2.7kg)に砂鉄が重目3分(1125g)あれば良しとする」とある^(註4)。実験の精度の問題もあるが、今回調査地からサンプルとして採取した土砂から取り出された砂鉄は、割合としては低いものであることから、当該地は採掘場としては不適当であったと考えられる。大蔵池南2号鉄穴流し遺構は、砂鉄採取のために採掘は行われたが、一時的なものであった可能性が高い。

稼山遺跡群南斜面の鉄穴流し遺構以外の調査例が極めて少ないので、周辺地域での今後の調査が待たれるところである。

(豊島)

(註1) 村上幸雄1980「第2章 結語」『稼山遺跡群(Ⅲ)』(久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3)) 久米開発事業に伴う文化財調査委員会

(註2) 俵國一1933「古來の砂鉄精錬法」(「古來の砂鉄精錬法」研究会編2007『復刻解説版古來の砂鉄精錬法』pp.52-53)

(註3) 同井義郎・瀬見浩ほか1973「六の原製鉄場跡」広島県教育委員会

(註4) 鶴充証2001『現代語訳 鉄山必用記事』丸善株式会社

2 二つ塚1号墳

二つ塚1号墳は、古墳の上下に別の遺構が見られる事がわかった。以下、各遺構ごとにまとめたい。

(1) 上層遺構について

上層遺構は、東西10.7m、南北8.4m、高さ西側2m、東側1mの長方形状の高まりで、西側の斜面には石が貼られている。また、西側以外の3方周囲は1段削られていて階段状になっている。この部分に石片がかなり堆積していた。この遺構の性格は、前述したとおり、車戸神社に伴うものである。文献によると、車戸神社は創建された年代は不明だが、大正2年に、麓の藤和田神社に合祀されている。

(絵図等からの検討)

大正2年の移築のため、当時の様子を知る人は地元にもいない。調査後に絵図(関連資料第24・25図)や文書^(註1)が見つかり、移築前の車戸神社の様子が明らかとなつた。それによると現在の道側に拝殿、鳥居があり、この鳥居側から本社(本殿)に至っている。また、文献から周囲に石垣・玉垣がめぐらっていたようである。拝殿と本殿との間に鳥居が描かれているが、通常は、鳥居があり拝殿、本殿の順で、ほとんどの場合、拝殿と本殿の間に鳥居は存在しない。この絵図をそのまま信用するには疑問もあるが、現状と比較して検討してみたい。

まず拝殿部分であるが、鳥居の抜き取り痕と思われる穴と道との間は、現状では平らである。この部分に拝殿があったとすると、文献では拝殿の規模が、縱二間半、横二間とありおよそ4.5m×3.6mである。この部分は現状で、奥行きが4m近くはあり、拝殿は通常横に長いのでこの部分に拝殿を考えるとおさまる計算になる。

次に鳥居部分であるが、検出した2個の穴を抜き取り痕と考えた。いずれも大きな穴で、抜き取り後にさらに大きく掘り込まれているようである。抜き取り痕は調査前の段階では北側しか確認できていなかった。この北側の抜き取り痕から道沿いに大きく削られているようであり、これら破壊時に抜き取り痕もさらに破壊された可能性がある。抜き取り痕間が現状でスロープ状を呈しており、この部分が登り

口と考えられる。絵図では階段状に描かれている。現状では石は見られず、また明瞭な階段状の掘り込みもない。石段ではなく簡単な階段状の掘り込みのみであった可能性が大きい。また、西側以外の周囲が階段状になっているのは、ここに石垣があり上部に玉垣がめぐっていたからと考えられる。さらに本殿自身は頂部の東側に描かれている。この事は墳長部東側で表土剥ぎ時に検出した石が、基礎部分の石であった可能性が大きい。検出時の状況は規則性が無く乱雑な状況であったため、移転時にかなり破壊を受けているものと思われる。文献では、本殿の規模は二尺五寸、横二尺でおよそ 75 × 60 cm である。基礎を考えても、十分墳頂部に本殿は建つことになる。

以上から、推測すれば絵図どおりの拝殿、鳥居、本殿といった建物配置は可能と思われる。

(現在の社)

現在藤和田神社にある社は（国版 12）、藤和田神社本殿の裏側にある。藤和田神社拝殿の裏手には車戸神社と書かれた鳥居があり、その奥に社はある。現在の車戸神社の社は下端 185 × 155 m、上端 17 × 14 m、高さ 1 m の石垣による台形状の基礎の上に、1 m 四方の建物の基礎があり、その上に 0.5 m 四方の社がのっている。この社は移築後のものを平成 13 年に石製で新しく造り直している^(注2)。社の寸法は移転前から比べると一回り小さくなっているようである。社の前には「車戸大明神」と書かれた木製額が置かれていて、下端前面には「車戸宮」と書かれた石製水鉢が置かれている。おそらくこの二者は当時のものであろう。前者はその大きさから本来は鳥居上などに付けられていたものと考えられ、絵図では、車戸大名神と書かれている事から鳥居上にのっていた事は、ほぼ間違いは無いものと思われる。現在の鳥居には「車戸神社」と書かれた新しい額が載っていて、この鳥居も新しく造られたものようである。

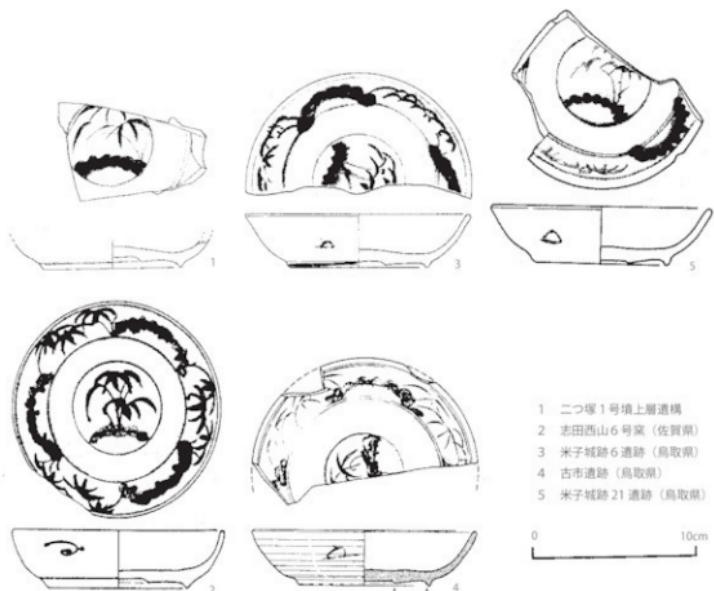
(出土遺物)

出土した遺物は、瓦、陶磁器、古銭であり、これらから神社の存続時期を考えてみたい。

瓦は平瓦と一部丸瓦である。通常神社の本殿には瓦を使用しないので、付随する建物の拝殿が瓦葺きであったことが考えられる。瓦の出土量が少ないので、移転時に瓦は転用されたか廃棄された可能性がある。

陶磁器の内第 22 図 28 の磁器は、蛇目四形高台で見込みに笠の染付けが見られる。同様な絵柄のものを第 23 図に示している。生産地の例では 2 の佐賀県・志田西山 6 号窯^(注3) から出土している。これと比べると良く似てはいるものの、細部が異なっている。例えば高台の形態や底部中央の厚さ、見込みの絵では笠の出る位置が中央で本例では右に寄っている。見込み中央とその外側の囲線との間隔も本例の方が広い。本例と絵柄が良く似ているのは、消費地であるが 4 の鳥取県・古市遺跡^(注4)、5 の鳥取県・米子城跡 21 遺跡^(注5) がある。3 の米子城跡 6 遺跡^(注6) は、見込みの笠の出る位置が異なるが、断面形は良く似ている。この 3 例の内、4 は在地の製品、3・5 は肥前系と報告されていて、4 は地元の浦富焼とされる。

この浦富焼は、鳥取藩の国産品保護開発政策によるもの一つで官営の窯ではなく民間の窯であり、小皿などの日常雑器が多数を占める磁器窯である。文様には竹（笠）を表現するものがあり、伝世品に本例と良く似た文様のものがあり、見込みには目跡がついている^(注7)。ただこれと比べると笠の表現などが簡略化されており、本例は見込みに目跡は見られない。また、浦富焼は安政 2（1855）年に創始され、明治の初め頃には生産は途絶えている^(注8)。この浦富焼は、鳥取城跡でも出土例があり鳥取藩の中である程度のシェアを保っていたと考えられている^(注9)。本例のある岡山県津市と鳥取県岩美町浦富は、直線距離で約 65km、現在の国道 53 号線で鉾を越え、鳥取市内に入りさらに国道 178 号線を東に行け



第23図 見込みに筆を描く磁器

ばたどりつく。当時の交通網・交通手段を考えれば、浦富は肥前地方と比べるとかなり近い位置にあるといえよう。

本例と古市遺跡の4や浦富焼とされる皿などを実見する機会があった⁽²⁰⁾。4は本例と比べると色調・質感がやや異なっていて、本例同様に見込みに目跡もない。また、4を浦富焼とされる他の図柄の皿（見込みに目跡あり）と比べると同様に色調などが異なっているようである。逆に他の浦富焼と本例は色調・質感が良く似ているようである。

以上から、本例は古市遺跡の4と比べても色調などが異なっており、同様の図柄が浦富焼にはあるが、これと比べても図柄が浦富焼の方が簡略化したものであり、見込みに目跡がないのが最大の相違点である。ただ、浦富焼の皿すべてに見込みに目跡があるのか、無いものがあるのかなど検討の余地は十分あるが、2のように肥前窯にも同様の図柄のものがある事から、少なくとも浦富窯が肥前窯の影響を何らかの形で受けているものと考えられる。本例は見込みに目跡が無い事から、5の米子城跡のものを肥前系としているように、現時点では肥前系と解釈したほうが良いのではないかと思われる。

2の肥前窯の時期はV期の1810～1860年代で⁽²¹⁾およそ19世紀の前半から中頃の所産である。ちなみに浦富焼は1855年以降明治初年ごろでおよそ19世紀の後半頃である。

備前焼は小皿のみであり、時期は明確でない。

古銭はほとんどが寛永通寶で17枚ある。出土状況から、神社の賽銭と思われるものがほとんどであるが、中にはかなり深い位置からの出土もあるので、社建築時の地鎮的な意味合いのものも含まれている可能性もある。寛永通寶以外の古銭は見られない。江戸期のものであるが、詳細な時期を決める手段に

はならない。

(時期)

二つ塚1号墳上にあった車戸神社は大正2年に移転している。それではいつ頃から存続していたのであろうか。石製に造り直した記録映像^{㉑㉒}によると、「車戸大名神」と書かれた鳥居額の裏に文政十(1827)年の年号があり、棟札が3~4枚あってその中に嘉永七(1854)年のものがある。また社伝を記した文献(第26図)によると、「造宮天保十二丑年十二月再營」とあり、この天保12(1841)年に再建されているようである。また、久米町史には現在の神社には石造の御手洗があって、これには「文政十丁亥年」と銘があるとされる^{㉑㉓}。文政10年は鳥居額の裏に書かれている年号と同じ1827年である。

また、寄託されている領家村文書を調べたが、今のところ文政10年を過る文書類は見られない。さらに出土した陶器の内時期が推測されるものでは、19世紀代のものであるが詳細な時期決定はできない。よってこれら事象を総合的に判断すると、車戸神社の初現は鳥居額に書かれた文政10年まで過るのはほぼ確実で、天保12年に再建され、その後棟札から嘉永7年などに手が加えられ、大正2年に現在の場所に移転した。その後老朽化に伴い、平成13年に石製に造り直されたと言う事になる。

(2) 古墳について

(墳丘・規模)

上層造構により周囲が大きく削平されているため、墳形・規模は明瞭ではない。まず規模であるが、旧表土や盛土の状況から8m以上の古墳である事は確かである。墳形については、元々方墳で周囲を削平したのか、円墳であったものの周囲を削平したのか検討を要する。これについては後述する。

埋葬施設は、痕跡すら検出できなかったが、例えば堅穴式石槨などであれば、多少大きめの石が出土するか、石を設置した際の掘り方があるはずである。これが無いということは、これら以外の可能性が高く、さらに上部に作られているものと推測される。須恵器と一緒に河原石が数点出土しているが出土量が少ない事から、これら河原石を枕石や棺材の支えと考えると、木棺であった可能性が一番大きい。また、盗掘穴からしか須恵器が出土しないのは、元々、墳丘がありその上から盗掘されその際埋葬施設が破壊され、さらに神社建築時などに上部が削平されたため、木棺の痕跡すら残らなかつたものと解釈できる。となると、古墳の墳丘の高さは結構あった事になる。現状で盛土が40cmはあるので、木棺の高さを考慮しても盛土は、1mぐらいはあったものと推測される。

(出土遺物と時期)

出土遺物は須恵器と鉄器がある。須恵器は杯・壺があるが点数は少ない。杯(第20図10~18)はほぼ完形に復元できるものがあり、いくつかに分類できる。

蓋の口径は13~15.8cmを測り、天井部の調整などから4タイプに分けられる。

A類(10)：口径15.8cm、器高5.8cmで、天井部と口縁部との境に稜がわずかに見られ、天井部は回転ヘラ削りを施す。

B類(13)：口径13cm、天井部と口縁部との境に明瞭な稜が見られ、天井部は回転ヘラ削りを施す。

C類(12)：口径14.6cm、器高4.1cmで、天井部と口縁部との境に稜がわずかに見られ、天井部は回転ヘラ切り後外周のみヘラ削りを施す。

D類(11)：口径15.2cm、口径4.8cmで、天井部の調整は不明だが、天井部と口縁部との境に段を持たないもの。

身は口径10~13.8cmで、ほとんど違はないが、口縁の立ち上がり具合から2タイプに分けられる。

a 類（15・16）：口径 10～12.4 cm、口縁の立ち上がりが 1 cm 以上で底部に回転ヘラ削りを施す。

b 類（17・18）：口径 12.4～13.8 cm、口縁の立ち上がりが 1 cm 以下で底部に回転ヘラ削りを施す。

杯のセット関係を求めるに、色調などから蓋 B と身 a、蓋 D と身 b のようである。

次に他との類例を検討してみたい。

杯蓋の A・C 類は、築瀬 2 号墳第 2 主体^(註14) に見られ、A 類は大畠 1 号墳 D・E 主体^(註15) に見られる。この大畠 1 号墳からは D 類も出土する。特に、D 類は天井部と口縁部との境に稜をもたないものでやや後出する可能性があるが、この両タイプは時期差がさほど無いか、同時期の工人差を見るべきものかもしれない。

B 類は、他と比べると小ぶりで、口縁部との境の稜が明瞭である。もしかすると、天地が逆で無蓋高杯の杯部の可能性を考えた。しかし、同時期の無蓋高杯は大畠 1 号墳にもあり、口縁部がもう少し外反し深さがあるようで、今回は杯として取り上げた。口径が他より小さい事、天井部との境の稜が明瞭であることから、A 類より先行する可能性が高い。

また、これら杯の特徴を類例から推測すれば、概ね陶邑編年^(註16) の、TK10 型式よりは新しい要素を含み、次の MT85 型式併行と考えられる。この MT85 型式には、天井部と口縁部との境の稜が明瞭なものと無いものとが見られる。また美作編年^(註17) で言えば VI 期の範疇で捉える事ができる。概ね TK10 型式の美作編年 V 期から次の VI 期の時期は、美作地方に横穴式石室が始めて導入された時期で、まだほとんど普及はしていない^(註18)。このため、本墳の埋葬施設が横穴式石室以外のもので木棺などであった可能性は大きい。

（地形の復元）

同一時期の古墳は、須恵器の類例で述べた築瀬 2 号墳や大畠 1 号墳がある。いずれも直径 9 m 程の円墳で、埋葬施設は木棺直葬である。同時期の古墳は、ほとんどが円墳で、方墳はほとんど知られていない。

方墳の例としては、時期は下るが美咲町塚の平古墳がある。丘陵頂部に立地する 12 × 9 m の方墳で埋葬施設は竪穴式石櫛である。須恵器編年では、TK 209 型式で本墳とは時期が新しくなる^(註19)。ただ、長方形の墳丘及び立地が良く似ている。この時期まで方墳（長方形墳）が存在するとなると、本墳も方墳であった可能性が出てくる。元々方墳で、その周囲北・東・南の三面を神社地としてカットし成形したと考えることもできる。ただ隣接する 2 号墳は直径 10 m の円墳で、墳丘の変化は受けていない。2 号墳の時期は不明だが、両者が丘陵頂部に隣接して存在し、その他周辺に見られる古墳（車戸 1・2 号墳など）がすべて円墳であることから、1 号墳も円墳であった可能性もてくる。本墳を円墳として地形を復元すれば、現在の地形では南東部分の上層遺構の墳端ラインが弧を描いている箇所があり、このラインが元々古墳に伴うものとすると直径 9 m 程に復元される。また、方墳であったとしても、一辺 8 m 以上の 9 m ぐらいになる。これらの場合かなり大規模な周囲の掘削が必要であり、同一規模であれば方墳の方が、土量が多い計算になる。ただ現状で神社の盛土が高さ 40 cm はあるので、この土量を確保するためには、かなり周囲を削ったことは確かである。

以上から、本墳の可能性は円・方墳の両者が考えられ明快な結論はでないが、上層遺構の地山の成形具合を見れば、円墳から方形基壇にしたのでは無く、方（長方形）墳から長方形の基壇にした可能性が大きいのではないかと思われる。

（3）下層遺構について

下層遺構として検出したのは土壙 1 基のみである。

出土した土器は壺・甕・高杯がある。この中で高杯（第20図8・9）の特徴は、杯部はくの字に屈曲して縁部を伸ばし、脚部は長脚になるもので、類例は本遺跡の南400mにある領家遺跡31号住居址^(註20)や稼山遺跡群内の法事坊遺跡^(註21)、西吉田北遺跡土壙41^(註22)、小原遺跡住居址1^(註23)などにある。これら類例から西吉田北遺跡の西吉田北3期、小原遺跡の小原I期の範疇で、概ね弥生時代後期前半の所産である。ただ、5の甕の口縁部については、後出の後期後半頃の可能性も否めないが、他の器種についてもほぼ同時期の所産と言えよう。

次に遺構の性格であるが、直径2m、深さ69cmを測る、円形土壙で底は平らである。断面は一部で袋状を呈しているが、その他はほぼ垂直に近い。そして単独で存在する。

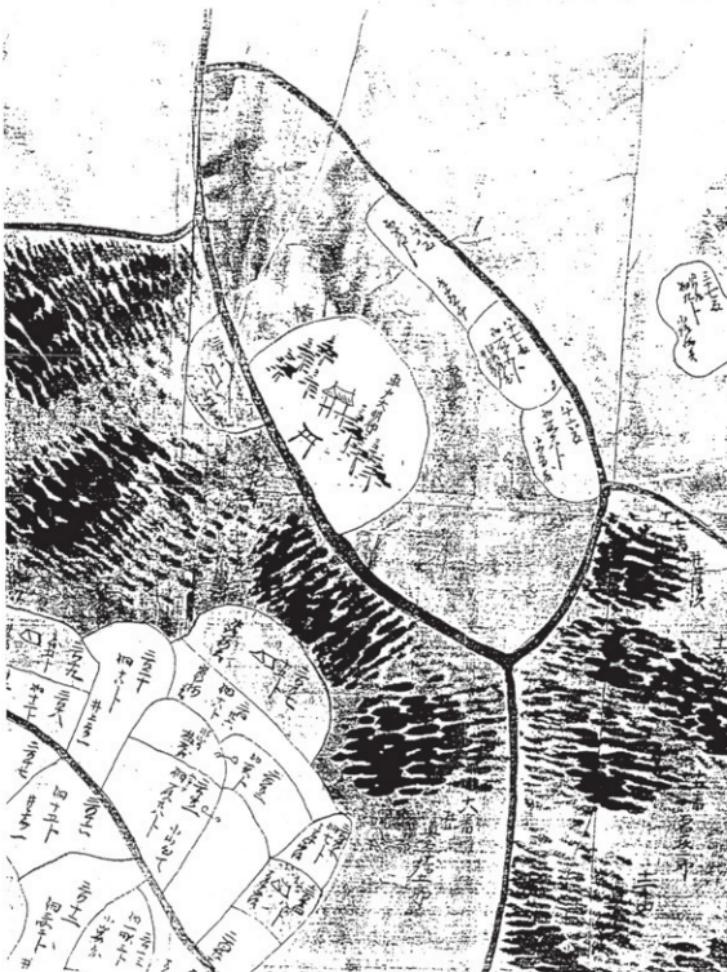
まず考えられるのは貯蔵穴である。しかし貯蔵穴とすると他例に比べ直径が大きく、明瞭な袋状を呈しておらず深さも足りないようである。さらに単独で見られる状況、内部から出土する土器はほとんどが破片で、完形に復元できるものは無い事からも、別の用途の可能性もある。炭も少量出土するが、これら出土物の状況は廃棄されたようであり、これはおそらく最終段階であろうから、当初は何らかの用途があったものと推測される。本遺跡の南に位置する領家遺跡では、円形袋状の貯蔵穴らしきものも出土していて、本例のような径が2mに及ぶものも1基あるがこれは深さが本例より浅い。このため両者の関連性は不明である。

以上から、遺構の性格については明瞭な見解はえていないが、丘陵頂部に立地する事から少なくとも南側斜面に位置する同時期の領家遺跡との関連は強いものと考えられる。

（小郷）

- （註1）小山統道氏所有で、寄託されている領家村文書。
- （註2）地元の井上悦甫氏、小山統道氏、小山譽富氏にご教示いただいた。
- （註3）野上建紀2000「磁器の福年（色絵以外）1碗・小环・皿・紅皿・紅猪口」「九州陶磁の福年」九州近世陶磁学会
- （註4）藤本隆之ほか1999「古市遺跡II」財团法人鳥取市教育福祉振興会
- （註5）湯村功ほか1998「米子城跡21遺跡」「鳥取県教育文化財団調査報告書56」財团法人鳥取県教育文化財団
- （註6）湯村功1996「米子城跡6遺跡」「鳥取県教育文化財団調査報告書44」財团法人鳥取県教育文化財団
- （註7）吉田政博ほか1970「因州浦富窯の紹介」岩美町教育委員会 岩美町教育委員会に資料の提供を得た。
- （註8）岩美町誌叢書編集委員会2006「新編岩美町誌下巻」岩美町
- （註9）佐伯純也2002「鳥取県における肥前陶磁器の様相」「国内出土の肥前陶磁器第一分冊」九州近世陶磁学会
- （註10）資料の実見にあたり鳥取市埋蔵文化財センター谷口恭子氏、神谷伊鶴氏にお世話になった。
- （註11）註3
- （註12）小山譽富氏が撮影し編集したもので「氏神様と車戸様」という表題がついている。
- （註13）久米町史編纂委員会1984「久米町史下巻」久米町教育委員会
- （註14）行田裕美1983「梁瀬古墳群」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第13集」津市教育委員会
- （註15）行田裕美ほか1994「大畠遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第47集」津市土地開発公社・津市教育委員会
- （註16）田辺昭三1981「須恵器大成」角川書店
- （註17）小郷利幸1992「門の山古墳群」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第46集」佐良山門の山古墳群発掘調査委員会・津市教育委員会
- （註18）この時期の横穴式石室墳としては、津市中宮1号墳。美作市穴が瀬古墳がある。
- 近藤義郎ほか1952「佐良山古墳群の研究第1冊」津山市
- 上柳武ほか2008「穴が瀬古墳」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告213」国土交通省岡山国道事務所・岡山県教育委員会
- （註19）河本清・高畠知功1992「家の平古墳群」中央町塚の平古墳埋蔵文化財発掘調査委員会
- （註20）栗野克己・山磨康平ほか1975「領家遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8」岡山県教育委員会
- （註21）村上幸雄・橋本悠司1979「稼山遺跡群I」「久米開発事業に伴う文化財調査委員会
- （註22）坂本心平ほか1997「西吉田北遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第58集」津市教育委員会
- （註23）木村祐子ほか「小原遺跡」「津市埋蔵文化財発掘調査報告第38集」津市土地開発公社・津市教育委員会

V 関連資料（車戸神社）



第24図 車戸神社周辺絵図